

桂枝 CINNAMOMI CORTEX

(基原)

Cinnamomum cassia Blume (科名:クスノキ科 Lauraceae) 又はその他同属植物の樹皮又は周皮の一部を除いたもの。

東医研薬局ではベトナム産桂皮 C.obtusifolium(Roxb.)Neesを使用。

(性状)

半管状又は巻き込んだ管状の皮片。外面は暗赤褐色、内面は赤褐色。特異な臭いがあり、味は甘く辛く、後にやや粘液性。

基原植物は常緑の高木で、若枝は四稜があり、葉は互生し、黄緑色の小さな花を円錐花序に多数つける。

花 5~7月
実 翌2月

(産地)

中国産: C.cassia Blume ・ 広南桂皮 中国南部 広東省・広西省に分布

<医薬品原料>

厚さ1~4mm 4~5年 全輸入6~7割

- ・ 東興桂皮 厚さ3~5mm 7~8年
- ・ 油桂皮 厚さ4~6mm 9~10年 東興桂皮
- ・ 桂枝 広南桂皮の細枝をそのまま乾燥

ベトナム産: ^{K2}

<医薬品原料>

- ・ ベトナム桂皮 野生品 ホール(管)状で流通

桂通桂皮 ベトナム桂皮のブローケン(砕き)

ジャワ・スマトラ産:

- ・ セイロン桂皮 香辛料やシナモンスティックとして

<香辛料>

- ・ ジャワ桂皮 使用される

日本産: 肉桂の根皮を使用、現在栽培は殆ど行われない

日本 根皮 冬 天候が乾燥している

(品質)

芳香が濃厚で、精油に富み、断面に紫紅色の部分が厚く存在し、舌先で味わってみても甘みを感じ、噛むと痺れる位の辛味を感じ渋みの無いものが良品とされる。芳香が濃厚なものは油細胞が多く放射組織に針状晶がみられる。

極度に粘液性の強いものは、粘液細胞が多く柱状晶がみられ品質が劣る。

*精油含有量は 0.5ml/50g以上と規定され、品質評価の指標となる。

ベトナム桂皮>桂通桂皮>油桂皮>東興桂皮>広南桂皮の順に良品ということになるが、ベトナム桂皮は灰分の点で局方不適となる。

STVET

(成分)

- ・精油：桂アルデヒドCinnamaldehyde 80~90%
Cinnamyl acetate、Phenylpropylacetate
- ・ジテルペノイド（抗補体作用・免疫溶血反応抑制）：
ケタル1 Cinnzeylanol、ケタル2 CinnassiolD、ケタル3 CinnassiolE
ラクト型 Anhydrocinnzeylanol、ジケト型CinnassiolC
- ・ノルセスキテルペノイド（抗潰瘍作用）：Cinnamoside、Cassioside
- ・タンニン（渋味成分 蛋白質と結合し酵素活性阻害又は高める）：
縮合型タンニンCinnamtanninA

(現代薬理)

桂枝は主として感染初期の生体防御に関与する。

解表剤

桂枝の主成分は精油（桂アルデヒド）であり、循環系には末梢血管を拡張し血流量を増加し体温を降下する。また、中枢興奮・抑制作用があり、鎮痛・解熱作用、抗痙攣作用、運動亢進抑制作用をしめす。また、消化器系には健胃作用、ストレス性胃びらん予防効果、胆汁分泌促進、腸管運動促進作用を示す。また、抗菌作用があり抗カビ作用、結核菌、肺炎菌、ブドウ球菌、赤痢菌等の増殖を阻害する。

その他以下の事が解明されている。

テトラサイクリンも強い

- ・歯周炎菌酵素の抑制作用：歯周炎菌から調製したコラーゲン分解酵素の活性を抑制し、酵素の細胞毒性を軽減する。（タンニン）
- ・抗炎症作用：抗トリプシン作用に強い活性。（タンニン）
- ・抗酸化・活性酸素生成抑制作用：リノール酸の空気酸化に対する抑制作用、老化、炎症、発癌、動脈硬化、糖尿病などに関

桂枝 関節痛疾患
桂枝 体を暖める

与する活性酸素生成抑制。(桂アルデヒド)

- ・抗潰瘍作用：胃粘膜損害を引き起こす攻撃因子であるペプシンの活性や胃液量を抑制し、防御因子である胃粘膜組織の血流を増加させ粘液分泌量の減少を抑制する事により強い抗潰瘍効果を発現する。

(シナモサイド) ノルエスキサイト

- ・寄生虫の運動抑制作用：アニサキスの幼虫の運動を抑制し、犬回虫に殺虫作用を示す。(桂アルデヒド)

- ・抗腫瘍作用：細網内皮系の賦活化により腫瘍の増殖を抑制する。

- ・抗アレルギー作用：免疫賦活作用があり、抗補体活性を示す(ジテルペノイド)が関与している。

I型アレルギーの皮膚アナフィラキシー反応を抑制。

II型アレルギーの逆皮膚アナフィラキシー、ホルスマン皮膚血管炎を抑制。

III型アレルギーのアルスス反応を抑制。

*IV型アレルギーには作用しない。

桂枝が起因とされる薬物アレルギー性肝炎や皮膚炎、発疹が報告されている。

- ・抗血栓・血小板凝集抑制作用：(桂アルデヒド)
- ・カテコールアミンの遊離作用：副腎からカテコールアミンを放出し、エピネフリンの濃度が増加する。(桂アルデヒド)

(古典的薬効・薬能)

薬味：辛・甘 薬性：温 帰経：心・肺・膀胱経

血行をよくし体内を暖める作用、肝気、のぼせ、奔豚気を鎮める作用、自汗、悪風、頭痛をおさめる作用、身体痛、脇腹痛、心痛、腹痛を治す作用、呼吸器系及び皮膚の機能を整える作用、解熱作用、胃腸機能を整える作用、経水を整える作用がある。

神農本草経：(上品に牡桂・菌桂と記載) 上気欬逆、結気喉痺吐吸を主り、関節を利し、中を補い血を増す。久しく服すれば神に通じ、身を軽くし、老いず。

大行 倦怠 心腹 月経過多 産後 尿量減少

薬徴：衝逆を主治す。傍ら奔豚、頭痛、発熱、悪風、汗出、身痛むを治す。

重校薬徴：上衝を主治す。故に奔豚、頭痛、冒悸を治す。発熱、悪風、自汗、
身体疼痛、骨節疼痛、経水の変を兼治す。

中医学：発汗解表 温経通陽

(その他)

桂枝+芍薬：表虚邪実の症を理し、営衛を調和する。

桂枝+甘草：心悸を止める。

桂枝+厚朴・杏仁：気を下し、咳を止める。

桂枝+麻黄・附子：経を温め痛みを止める。

桂枝+当帰・芍薬：活血通経する。

桂枝+茯苓・朮：陽を通じ水を利し痰飲を化す。

ケイヒ 桂皮 CINNAMOMI CORTEX

〈原植物〉

本品は、*Cinnamomum cassia* Blume (Lauraceae : クスノキ科) 又はその他同属植物の樹皮をそのまま又は周皮を多少除いたものである。

C. cassia Blume は中国(福建、広東、広西、浙江、雲南)各省及びベトナム北部インドネシアに分布し、山地の斜面、砂地などに生え栽培



される常緑の高木である。樹高10~17m、樹皮は灰褐色で芳香があり、若枝は四稜がある。葉は互生し、長楕円形から広ひ針形で長さ8~17cm、尖頭で全緑、革質、上面に光沢があり、下面は灰緑色で細柔毛がある。枝端と葉えきに黄緑色の小さな花を円すい花序に多数つける。液果は楕円形状か倒卵形で長さ約1.2cm、暗紫色に熟する。花期は5~7月、果期は次年の2~3月。

同属植物として *C. obtusifolium* (Roxb.) Nees (ベトナム産桂皮) は中国南部及びインドシナ、インドなどに分布し、山地の密林、溪側などに生息する。

また、*C. zeylanicum* Nees (セイロン桂皮)、*C. burmannii* Blume (ジャワ桂皮) なども栽培されるが、薬用としては前述2種がほとんどである。

また、中国では若い枝を「桂枝」、幼果を「桂丁」と称して薬用に使用する。

桂皮はクスノキ科 *Cinnamomum* 属であるが、その種は250~270ともいわれ、現在桂皮の基原植物である *Cinnamomum* 属の系統分類が確立されていないため、類似植物及び基原植物については、日局11に準ずる。

〈市場品〉

桂皮は薬用以外の用途にも多く利用され、香辛料、薫香料、製菓原料などの分野での利用が全輸入量の約6割を占め、医薬品原料として用いられるものとは種類が異なり、ジャワ桂皮、スリランカ桂皮も使用されている。

医薬品原料としては、中国産、ベトナム産のみが輸入されている。

- 1) 中国産 *C. cassia* Blume を起原とするもので、医薬品原料として輸入されるものの

8割を占めている。

- 広南桂皮：広東省西南部から広西壮族自治区東南部を流れる西江流域で生産される栽培ものである。厚さ1～4mmで外面は暗灰褐色、内面は褐色で折れやすい。4～5年の枝皮で味は甘く、辛く、後にやや粘液性で、わずかに収れん性である。全輸入量の6～7割を占め最大である。
- 東興桂皮：広西壮族自治区の北部山岳地帯である東興を中心として採集される野生品の枝皮である。7～8年を経過しており、厚さ3～5mmぐらいのものである。広南桂皮に次いで輸入量が多い。
- 油桂皮：東興桂皮の肉厚（4～6mm）のもので9～10年を経過したものとされる。
- 桂枝：広南桂皮の径1cm以下の細枝をそのまま乾燥したものである。径5mm以下のものは桂枝尖とも呼ばれる。局方は不適である。

上述以外に中国の成書には多数の *Cinnamomen* 属植物 (*C. ineris*, *C. tamata* など) があり、数種のもものが桂皮として扱われているようであるが、生薬の産生は皆無である。

また中薬大辞典では、肉桂を *C. cassia* Blume、桂皮を *C. japonicum* Sieb. や *C. burmannii* (Nees) Bl. などにあて、両者を異なるものとして記載（薬効・主治について後述参照）しているが、現在中国から日本へ輸入されるものは *C. cassia* Blume が起源となっているものが主体を占めているようである。さらに、産地、調製法、経過年数などで名称を異にするが、原植物は同じもの若しくは、*C. cassia* Blume の栽培品種と考えられている。

2) ベトナム産 現在 *C. obtusifolium* (Roxb.) Nees を起源とするものとされている。

ベトナム桂皮：北部で採集される野生品の樹皮で、ホール（管）状のまま流通される。厚さにより No. 1～No. 3 まで等級分けされ、当社はこのものの No. 1（3～7mm）を取り扱っている。

桂通桂皮：上述の桂皮の No. 1～No. 3 のブローケン（碎き）である。

上記の産地以外、かつて我が国では、日本産のニッケイ *C. sieboldii* Meisn の根皮を肉桂（俗にチリチリ）と称し使用していたようであるが、現在はその栽培はほとんど行われず、市場の桂皮は全て上述 1) 2) の輸入品のみで賄われている。

〈選 品〉

古方薬品考：味辛ク甘クシテ気芳発ナル者ヲ良品ト為ス。気味薄キ者ハ用ユルニ堪エズ。

新古方薬囊：気味厚キ者ナレバ何レニテモ可ナリ。

重校薬徴：辛辣ニシテ甘味アル者上品ナリ。

方 伎 雜 誌：唐ノ品香氣ツヨクシテ、辛味ツヨク少シク甘味ヲ帯ル物佳ナリ。根皮ト呼ブ物ハ用ユベカラズ。

和漢薬の良否鑑別法及び調製法：色相紫黒色デ辛クテ甘ク香氣ノヨイモノガ良品デアル。

以上をまとめると「色調、厚さはあまり関係なく、とにかく香りが強く、始め甘く後に辛味を強く感じるもの」が良品といえる。

〈漢方薬理〉

神農本草経（上品）：上気欬逆、結気喉痺吐吸ヲ主リ、関節ヲ利シ、中ヲ補イ血ヲ増ス。

薬 性 提 要：経ヲ温メ、脈ヲ通ジ、汗ヲ発シ、肌ヲ解シ、陽ヲ益シ、陰ヲ消シ、百薬ヲ宣導ス。

重 校 薬 徴：上衝ヲ主治ス。故ニ奔豚、頭痛、冒悸ヲ治ス。発熱、悪風、自汗、身体疼煩、骨節疼痛、経水ノ変ヲ兼治ス。

古 方 薬 議：味辛温、関節ヲ利シ、筋脈ヲ温メ、煩ヲ止メ、汗ヲ出シ、月閉ヲ通ジ、奔豚ヲ泄ラシ、諸薬ヲ先ズ聘通シ、使イト為ス。

薬 徴：衝逆ヲ主治スルナリ。

要約すると「気血をよくめぐらし、気の上衝を下し、筋脈をゆるめ、肌表の邪気を発解し、頭痛をとり、身体の疼痛、経水の変を治す。」

〈中 医 学〉

1) 肉 桂

性 味：辛甘、熱

帰 経：腎、脾、膀胱経ニ入ル。

功用主治：元陽ヲ補イ、脾胃ヲ暖メ、積冷ヲ除キ、血脈ヲ通ス。命門火衰、四肢ノ冷エ、脈ノ衰弱、亡陽ト虚脱、腹痛泄瀉、寒疝奔豚、腰膝ノ冷エ痛ミ、無月経、腹中ノ硬結、陰疽、流注、虚陽浮越、上熱下寒ヲ治ス。

2) 桂 皮

性 味：辛、温

帰 経：心、肝、脾、腎ノ4経ニ入ル。

功用主治：脾胃ヲ暖メ、風寒ヲ散ラシ、血脈ヲ通ス。腹冷胸満、嘔吐噎膈、風湿痺痛、跌損瘀滞、血痢腸風ヲ治ス。

3) 桂 枝

性 味 : 辛甘、温

帰 経 : 膀胱、心、肺經ニ入ル。

功用主治 : 汗ヲ発シ肌ヲ解ク、経ヲ温メ脈ヲ通ス。風寒表証、肩背肢節疼痛、胸痺痰飲、
経閉癥瘕ヲ治ス。 (出典: 中薬大辞典)

〈薬 理〉

1) 中枢に対する作用

桂皮から得られる精油には、体温降下及び下熱を主とする作用、ストリキニーネ痙攣・ニコチン痙攣に対する抗痙攣作用。桂皮アルデヒドは、マウスにおいて自発運動の減少、メタンフェタミンによる運動亢進の抑制など中枢に対しては、興奮作用と抑制作用が認められている。

2) 循環器系に対する作用

ケイヒアルデヒドには、温刺ウサギに対する心臓収縮力の増強、末梢血管の持続的拡張作用による体温下降、末梢血流の増加作用、モルモット心臓に対する心拍数・振幅の増加作用(心臓交感神経終末からのノルアドレナリンの遊離による)など血液循環を円滑にし、末梢血管の拡張による解熱作用が報告されている。

3) 消化器系に対する作用

精油成分は、マウスストレス性胃びらん予防効果、消化酵素活性阻害(でんぷん消化酵素の安定)、胆汁分泌促進、腸管運動促進作用、モルモットの摘出小腸に対する鎮痙作用。

4) 抗菌作用

桂皮の精油は抗カビ作用(全粒粉パンに0.1~0.01%添加されている)、結核菌・肺炎菌・各種ブドウ状球菌・赤痢菌類増殖阻止作用が報告されている。

5) 抗アレルギー作用

水製エキスは、感作モルモット肺切片による実験で抗アレルギー作用、腹腔内投与でラットの逆皮膚アナフィラキシー、フォルマン皮膚脈管炎及びウサギのアルチュス反応抑制などの抗補体作用が報告されている。

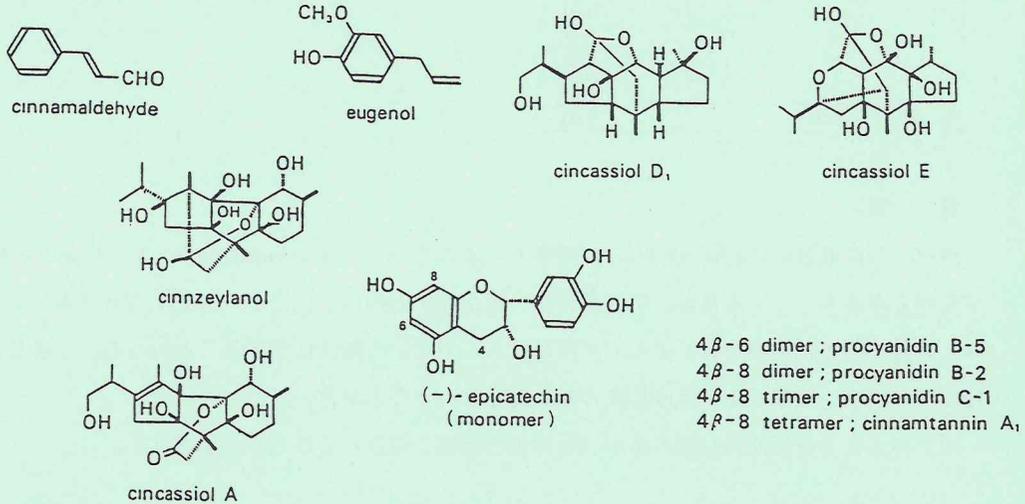
6) その他

水製エキスは、ラット腹腔内投与により血清中の尿素窒素量(BUN)の著名な減少及び総コレステロール量の増加が報告されている。また最近では桂皮アルデヒドが、アニサキス(幼線虫)の活動抑制効果があるという報告もある。

〈成 分〉

精油を1~3%含み、その化学組成は Cinnamaldehyde (80~90%) を主成分として、Cinnamyl acetate、Phenylpropyl acetate、Cinnzeylanol、などが含まれている。他に微量成分として、

Cinnamic acid、Salicylaldehyde、Salicylic acid など約10種、抗補体活性画分から特異的な骨格を持つジテルペノイドが単離され骨格によりケタールⅠ、Ⅱ、Ⅲ型、ラクトン型、ジケトン型の5形式に類別される。また、近年関心が注がれているタンニン結合型のみで加水分離型タンニンは含まれていない。



〈品質規格〉

日本薬局方における規格

- 1) 性状 : 外観、色、におい、味、内部形態、その他の特徴により判定。
- 2) 確認試験 : 薄層クロマトグラフ法により、紫外線照射下のスポットを認める。(ケイヒアルデヒドの紫外線吸収に伴うプレートバックグラウンドの色調の変化を利用したもの) また、このスポットは2,4-ジニトロフェニルヒドラジン試液の噴霧により黄だいたい色を呈する。
- 3) 乾燥減量 : 15.5%以下(6時間)
- 4) 灰分 : 生薬中の無機塩類の含有量の目安となる灰分は、5.0%以下と規定されている。
- 5) 精油含量 : 粉末50.0gをとり精油定量法により試験を行うとき、その量は0.5ml以上である。

〈市場品桂皮の精油含有量〉

試料	ロット	精油含量(ml)
桂通桂皮	A	2.15
	B	2.17
	C	2.02
	D	2.03
	E	2.19
	F	2.12
	G	2.24
	H	2.04
	I	2.41
	J	2.43
平均		2.18

試料	ロット	精油含量(ml)
東興桂皮	A	1.34
	B	1.32
	C	1.05
	D	0.93
	E	1.18
	F	1.10
	G	1.30
	H	1.48
	I	1.30
	J	1.22
平均		1.22

試料	ロット	精油含量 (ml)
広南桂皮	A	0.70
	B	0.85
	C	0.81
	D	0.95
	E	1.05
	F	0.87
	G	0.85
	H	1.05
	I	0.98
	J	1.01
平均		0.91

試料	ロット	精油含量 (ml)
油桂皮	A	1.63
	B	1.70
	C	1.10
	D	1.80
	E	1.30
平均		1.51

〈考察〉

桂皮の精油成分中に80%~90%の高濃度で含まれている Cinnamaldehyde は、芳香と辛味を指すものと考えられているため、精油含有量の値が高いものほど、古来の選品である「香りが強く、はじめ甘く、後に辛味を感じるものが良品である」という条件に適することになる。つまり、桂通桂皮>油桂皮>東興桂皮>広南桂皮の順に良品ということが言える。

以上のことより精油含有量の値が品質評価の指標となりえることが示唆される。

〈参考〉

試料	ロット	精油含量 (ml)
No.1 ベトナム桂皮 (ホール)	A	3.02
	B	3.30
	C	3.01
	D	3.50
平均		3.21

左記にホールNo.1 ベトナム桂皮の精油含量を示す。

精油含量だけを考えると、抜群に値は高いものの灰分の点で局方不適となるものもある。

〈参考文献〉

- (1) “第11改正日本薬局方解説書” 広川書店 (1986)
- (2) “原色和漢薬図鑑” 難波恒雄著、保育社
- (3) “中薬大辞典” 上海人民出版社
- (4) “薬学雑誌” 104(3)261-274 (1984)、新田あや
- (5) “和漢薬” 377号、230号 木村雄四郎
- (6) “現代東洋医学” Vol. 3 No. 1 (1982. 1. 1)
- (7) “生薬学概論” 難波恒雄 津田喜典著、南江堂

(株) ウチダ和漢薬 資料 No. I - 20

(1991年6月作成)

漢方特別講座テキスト

生薬解説

桂枝

日本漢方協会

【生薬の参考資料作成に当たって】

日本漢方協会

一、本講座の生薬解説についての参考のため、本資料を作成した。

一、編集対象の書籍は左記の通りであるが、左記の掲載順序がそのまま編集順序となっている。

なお、編集順序の意図は全体像を参考にするため、日中の局法等を掲載した。次に、古典類を年代順に配列し、最後に中医学の生薬解説書を掲載した。また、万病回春解説の中から生薬に関する箇所を抜粋し参考に作成した。

(1) 日本薬局法および日本薬局法外生薬規格

(2) 中華人民共和国薬典

(3) 和漢薬百科図鑑 〆難波 恒雄 著

(4) 神農本草経 〆近世・漢方医学書集成53 森 立之

(5) 本草綱目 〆李 時珍 国訳 本草綱目

(6) 本草備要 〆王 昂 文光図書公司印行本および寺師 睦宗 訓

(7) 薬徴 〆吉益 東洞・西山 英雄 訓訳 未収載生薬は近世・漢方医学書集成11 吉益 東洞

(8) 古方薬品考 〆近世・漢方医学書集成56 内藤 尚賢

(9) 新古方薬囊 〆荒木 性次 著

(10) 漢薬の臨床応用 〆神戸中医学研究会 訳編

(11) 処方理解のための漢方配合応用および続編 〆翻訳 医学研究会 監修 洪輝騰・根本 光人

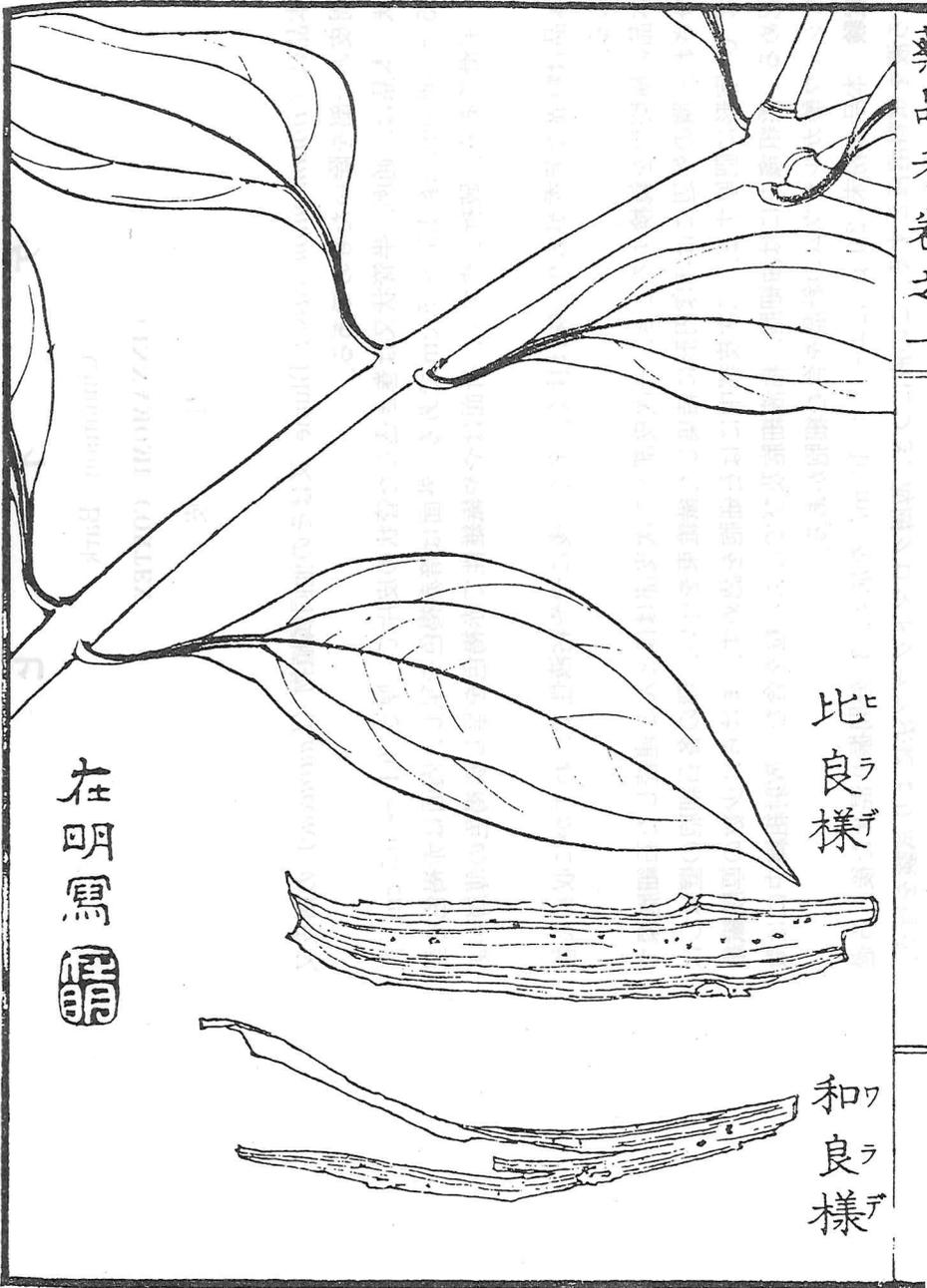
(註) 万病回春解説 〆松田 邦夫 著

一、全文を収載するとかかなりのページ数となるので必要と思われる部分のみ抜粋し編集した。ご了承願いたい。

一、編集の都合上、各原本と掲載位置、順序等が異なる事、また編集の掲載ミス等も予測されるが、この点も併せてご理解とご了承を願いたい。お気付きの点があればご指摘願えれば幸いです。

桂枝

藥石本草卷之十一



在明寫
晴

比良様

和良様

ク イ ヒ

Cinnamon Bark
CINNAMOMI CORTEX

桂皮

本品は *Cinnamomum cassia* Blume 又はその他同属植物 (*Lauraceae*) の樹皮又は周皮の一部を除いたものである。

性状 本品は、通例、半管状又は巻き込んだ管状の皮片で、厚さ 0.1 ~ 0.5 cm、長さ 5 ~ 50 cm、径 1.5 ~ 5 cm である。外面は暗赤褐色を呈し、内面は赤褐色を呈し、平滑である。破折しやすく、折面はやや繊維性で赤褐色を呈し淡褐色の薄層がある。

本品は特異な芳香があり、味は甘く、辛く、後にやや粘液性で、わずかに収れん性である。

本品の横切片を鏡検するとき、一次皮部と二次皮部はほとんど連続した石細胞環で区別され、環の外辺にはほぼ円形に結集した繊維束を伴い、環の各石細胞の壁はしばしば U 字形に肥厚する。二次皮部中には石細胞を認めず、まばらに少数の厚膜繊維を認める。柔組織中には油細胞、粘液細胞及びでんぷん粒を含む。放射組織中には微細なシユウ酸カルシウムの針晶を含む細胞がある。

確認試験 本品の粉末 2.0 g にエーテル 10 ml を加え、3 分間振り混ぜた後、ろ過し、ろ液を試料溶液とする。この液につき、薄層クロマトグラフ法により試験を行う。試料溶液 10 μ l を薄層クロマトグラフ用シリカゲル (蛍光剤入り) を用いて調製した薄層板にスポットする。次にヘキサノン・クロロホルム・酢酸エチル混液 (4 : 1 : 1) を展開溶媒として約 10 cm 展開した後、薄層板を風乾する。これに紫外線 (主波長 254 nm) を照射するとき、 R_f 値 0.4 付近に紫色のスポットを認める。このスポット

トは、2,4-ジニトロフェニルヒドラジン試液を噴霧するとき、黄だいたい色を呈する。
乾燥減量 15.5 % 以下 (6 時間)。

灰分 5.0 % 以下。

精油含量 本品の粉末 50.0 g をとり、精油定量法により試験を行うとき、その量は 0.5 ml 以上である。ただし、あらかじめガラスコ内の試料上にシリコーン樹脂 1 ml を加え、試験を行う。

注 釈

【本質】 生薬、健胃薬

【適用】 漢方処方用薬であり、かぜ薬、鎮痛・鎮けい薬、解熱・鎮痛・消炎薬、動悸抑制薬、保健強壯薬、婦人薬とみなされる処方及びその他の処方に高頻度で配合されている。また、芳香健胃薬として食欲不振、消化不良に粉末を配合剤として用いる (粉末の1日最大分量 1 g)。また、賦香料とすることもある。

漢方処方：安中散、胃風湯、胃芍湯、茵陳五苓散、温経湯、黄耆建中湯、黄連湯、葛根湯、帰耆建中湯、桂枝湯、桂枝加葛根湯、桂枝加芍薬湯、桂枝加芍薬大黄湯、桂枝加朮附湯、桂枝加竜骨牡蛎湯、桂枝人参湯、桂枝茯苓丸、桂麻各半湯、堅中湯、牛膝散、五積散、五苓散、柴胡桂枝湯、柴胡桂枝乾姜湯、柴胡加竜骨牡蛎湯、柴芍湯、治打撲一方、炙甘草湯、十全大補湯、小建中湯、小青竜湯、折衝飲、桃核承気湯、当帰湯、当帰建中湯、当帰四逆湯、当帰四逆加呉茱萸生姜湯、独活葛根湯、女神散、人参養荣湯、八味地黄丸、麻黄湯、薏苡仁湯、苓桂甘棗湯、苓桂朮甘湯など。

Gnispji

桂 枝

Guizhi

RAMULUS CINNAMOMI

本品为樟科植物肉桂 *Cinnamomum cassia* Presl 的干燥嫩枝。春、夏二季采收,除去叶,晒干,或切片晒干。

【性状】 本品呈长圆柱形,多分枝,长30~75cm,粗端直径0.3~1cm。表面棕色至红棕色,有纵棱线、细皱纹及小疙瘩状的叶痕、枝痕、芽痕,皮孔点状或点状椭圆形。质硬而脆,易折断。切片厚2~4mm,断面皮部红棕色,木部黄白色至浅黄棕色,髓部略呈方形。有特异香气,味甜、微辛,皮部味较浓。

【鉴别】 (1) 本品横切面:表皮细胞1列,嫩枝可见单细胞非腺毛。木栓细胞3~5列,最内1列细胞外壁增厚。皮层有油细胞及石细胞散在。中柱鞘石细胞群断续排列成环,并伴有纤维束。韧皮部有分泌细胞及纤维散在。形成层明显。木质部射线宽1~2列细胞,含棕色物,导管单个散列或2至数个相聚;木纤维壁较薄,与木薄壁细胞不易区别。髓部细胞壁略厚,木化。射线细胞含小草酸钙针晶。

(2) 取本品粉末0.5g,加乙醇10ml,密塞,冷浸20分钟,时时振荡,滤过,滤液作为供试品溶液。另取桂皮醛对照品,加乙醇制成每1ml含1 μ l的溶液,作为对照品溶液。照薄层色谱法(附录57页)试验,吸取供试品溶液10~15 μ l,对照品溶液2 μ l,分别点于同一硅胶G薄层板上,以石油醚(60~90 $^{\circ}$ C)-醋酸乙酯(17:3)为展开剂,展开,取出,晾干,喷以二硝基苯肼乙醇试液。供试品色谱中,在与对照品色谱相应的位置上,显相同的橙红色斑点。

【炮制】 除去杂质,稍泡,洗净,润透,切薄片,晾干。

【性味与归经】 辛、甘,温。归心、肺、膀胱经。

【功能与主治】 发汗解肌，温通经脉，助阳化气，平冲降气。用于风寒感冒，脘腹冷痛，血寒经闭，关节痹痛，痰饮，水肿，心悸，奔豚。

【用法与用量】 3～9g。

【贮藏】 置阴凉干燥处。

肉 桂

Rougui

CORTEX CINNAMOMI

本品为樟科植物肉桂 *Cinnamomum cassia* Presl 的干燥树皮。多于秋季剥取，阴干。

【性状】 本品呈槽状或卷筒状，长30～40cm，宽或直径3～10cm，厚0.2～0.8cm。外表面灰棕色，稍粗糙，有不规则的细皱纹及横向突起的皮孔，有的可见灰白色的斑纹；内表面红棕色，略平坦，有细纵纹，划之显油痕。质硬而脆，易折断，断面不平坦，外层棕色而较粗糙，内层红棕色而油润，两层间有1条黄棕色的线纹。气香浓烈，味甜、辣。

【鉴别】 (1) 本品横切面：木栓细胞数列，最内层细胞外壁增厚，木化。皮层散有石细胞及分泌细胞。中柱鞘部位有石细胞群，断续排列成环，外侧伴有纤维束，石细胞通常外壁较薄。韧皮部射线宽1～2列细胞，含细小草酸钙针晶；纤维常2～3个成束；油细胞随处可见。薄壁细胞含淀粉粒。

粉末红棕色。纤维大多单个散在，长梭形，长195～920μm，直径约至50μm，壁厚，木化，纹孔不明显。石细胞类方形或类圆形，直径32～88μm，壁厚，有的一面非薄。油细胞类圆形或长圆形，直径45～108μm。草酸钙针晶细小，散在于射线细胞中。木栓细胞多角形，含红棕色物。

(2) 取本品粉末0.5g，加乙醇10ml，密塞，冷浸20分钟，时时振摇，滤过，滤液作为供试品溶液。另取桂皮醛对照品，加乙醇制成每1ml含1μl的溶液，作为对照品溶液。照薄层色谱法（附录57页）试验，吸取供试品溶液2～5μl，对照品溶液2μl，分别点于同一硅胶G薄层板上，以石油醚（60～90℃）-醋酸乙酯（85：15）为展开剂，展开，取出，晾干，喷以二硝基苯胍乙醇试液。供试品色谱中，在与对照品色谱相应的位置上，显相同颜色的斑点。

【検査】 水分 照水分測定法（附录30页二法）測定，不得过15.0%。
总灰分 不得过5.0%（附录31页）。

【炮制】 除去杂质及粗皮。用时捣碎。

【性味与归经】 辛、甘，大热。归肾、脾、心、肝经。

【功能与主治】 补火助阳，引火归源，散寒止痛，活血通经。用于阳痿，官冷，腰膝冷痛，肾虚作喘，阳虚眩晕，目赤咽痛，心腹冷痛，虚寒吐泻，寒疝，奔豚，经闭，痛经。

【用法与用量】 1~4.5g。

【注意】 有出血倾向者及孕妇慎用，不宜与赤石脂同用。

【贮藏】 置阴凉干燥处，密闭保存。

厚朴 *Houttuynia cordata* (Thunb.) Sieber

第58 図版

58—1~10 桂皮 (けいひ) CINNAMOMI CORTEX

1. 神桂
2. ベトナム桂皮
3. 広南桂皮
4. 東興桂皮
5. 桂心
6. セイロン桂皮
7. 広西桂通
8. 肉桂
9. チリチリ桂
10. 桂葉柄

桂皮は『神農本草経』の上品に「菌桂クニキ」および「牡桂ボウキ」の名で収載されている。唐の蘇敬は「菌は竹名である。古方に用いる筒桂がこれで三重のものが良い。筒桂には二、三重に巻いたものがある。葉は柿葉に似ている。内側には三脈があつて，肌理はこまやかで薄く竹のようである。大枝，小枝ともに菌である。しかし大枝の皮は重巻せず，味は淡薄で薬に入れない」といっている。菌は筒の字に似ており，後人が筒を誤つて菌と書いたのが習慣となつたのであろうといわれている。牡桂については，明の李時珍は「即ち木桂であつて薄くて味が淡い。粗いものを去つて用いる。その最も薄いものが桂枝であり，枝の嫩小なものを柳桂という」としている。『名医別録』には桂皮類の産地を「桂は桂陽（今の広東省連県）に生ず。牡桂は南海（広東省番禺県北）の山谷に生ず。菌桂は交趾（ベトナム北部），桂林（広西省馬平県付近）の山谷巖崖間に生ず」とし，李時珍はこの「桂」を「即ち肉桂であつて，厚くて辛烈である。粗皮を去つて用う。そのうち外皮を去つたものが即

ち桂心である」といっている。しかし蘇敬は「桂はただ二種あるだけで、『名医別録』に単に桂といったものは杜桂のことで、小嫩枝の皮で肉多く半ば巻き、内側が必ず皺のあるものを肉桂または桂皮と名づけ、一名桂心ともいう。融州(広西省融県西)、桂州(広西省桂林県)、交州(広西省蒼梧県)に産するものが甚だ良い」といっている。陳藏器は「菌桂、牡桂、桂心の三種は同一物である」とし、宋の蘇頌も「今嶺表(広東、広西両省)から産出するところを見ると、筒桂、肉桂、桂心、官桂、板桂などの名があるが、医家が之を分別して用いることは稀である」といっている。

『傷寒論』、『金匱要略方』などの医籍には、すべて「桂枝」の名で処方されているが、これは思うに桂の枝の皮を指したものであろう。二重、三重に巻くのは枝皮であり、それで筒桂の名があるのであろう。現在市販の桂枝は、桂の枝そのもので、処方にこれを輪切りにして用いているが、これは材部を去って皮部のみ用いるべきであらう。市場の桂皮はすべて幹皮であるが、古来の桂皮に充分代用できる。

桂皮の類は古くエジプトの古文獻にもその記載がみられるが、このものが東洋のもので同一かどうかは疑問である。しかしAD1世紀の Dioscorides の『De Materia Medica (ギリシャ本草)』には“Kinnamono”と“Kassia”の二品名を記載しており、アラビヤ人により東洋からもたらされたもので種々の商品があると記されているから、古くから東西交易の商品とされていた。

【基源】クスノキ科 (Lauraceae) のケイ *Cinnamomum cassia* Blume およびその他同属植物の樹皮を乾燥したもので、その産地、品質により種々の名称がある。現在日本市場に輸入されるものは、広南桂皮、東興桂皮、ベトナム桂皮などが主である。広南桂皮、東興桂皮の原植物は *C. cassia* Blume で *Cassia bark* として扱われ、品質により「官桂」(桂通、5~6年の幼樹の樹皮)、「企辺桂」(清化桂、10年余りの樹幹皮)、「板桂」、「桂心」(官桂を整形したもの)、「桂碎」(官桂の塊片)などに分けられる。ベトナム桂皮の原植物は *C. obtusi-*

folium Nees および *C. obtusifolium* Nees var. *loureirii* Perrot et Eberh. などであらう。

欧米で用いられる Cinnamon bark は *C. verum* J. S. Presl (= *C. zeylanicum* Nees) の幹皮で、かつてセイロン島に主産し、セイロン桂皮として世界的に有名であった。このものはコルク皮をとり去って調製しており、品質的にも優秀なものであるが、最近では *C.*

*verum*でないものが同様の調製をされて市場にセイロン桂皮として出まわっているから注意を要する。

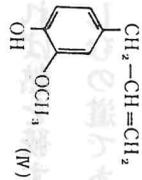
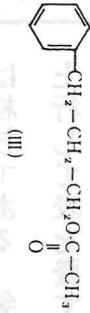
タイ国産のタイ桂皮は *C. iners* REINW. ex BLUME に基づくものである。またジャワ桂皮は *C. burmanni* BLUME に基づくものであろうとされている。近年まれに輸入されるボルネオ桂皮は *C. chianan* BLUME, *C. javanicum* BLUME などの幹皮と思われるが確かな基源は不明である。台湾桂皮はタイフンニッケイ *C. pseudo-louveirii* HAW. の樹皮が主である。これらはすべて中国、ベトナム産桂皮の代用品であって品質は劣る。

日本産の肉桂と称されるものはニッケイ *C. sieboldii* MEISSN (= *C. louveirii* auct. Jap. non NEES) の根皮で、俗に荒皮、中巻、小巻、チリチリに大別される。かつて桂皮粉もしくは桂皮油に混じるため「桂葉柄」が輸入されたことがあるが、これは *C. cassia* の葉柄部を乾燥したものであった。

〔産地〕 *C. cassia* は中国南部特に広東省、広西に産する。*C. obtusifolium* はベトナム、*C. iners* はタイに産する。*C. sieboldii* は日本の和歌山県、四国などに主産する。

〔成分〕 *C. cassia* の樹皮には精油 1.0~3.4% を含み、その主成分は cinnamaldehyde (= cinnamic aldehyde) (I) 75~90% で、その他 cinnamyl acetate (II), phenylpropyl acetate (III), cinnamic acid, salicyl aldehyde などである。また、ジテルペノイド cinnzeylanine, cinnzeylanol, anhydrocinnzeylanine, anhydrocinnzeylanol, cinnacassiol A, B, C₁, C₂, C₃, D₁, D₂, D₃, D₄, E, およびその 19-*O*-glucoside などを含む、さらにタンニンとして単量体の *l*-epicatechin, 二量体の procyanidin B-2, B-5, 三量体の procyanidin C-1, 四量体の cinnamtannin I を含む。

C. sieboldii の根皮には精油約 1.0% が含まれ、その主成分は cinnamaldehyde (cinnamic aldehyde) 30%, camphene, 1,8-cineole, linalool などである。*C. verum* (= *C. zeylanicum*) の樹皮には精油 1.0~2.0% が含まれ、その主成分は cinnamaldehyde (cinnamic aldehyde) 65~75%, eugenol (IV) 4~8%, *l*-phellandrene, α -pinene β -pinene, camphene, geraniol, linalool, terpinen-4-ol などである。その他 cinnzeylanol, cinnzeylanine, cassinoid, cinnanoside, およびタンニンとして *l*-epicatechin, procyanidin B-1, B-2, B-5 などを含む。



〔薬理作用〕精油には腸蠕動亢進作用があり、駆風の効がある。

桂皮油の主成分である cinnamic aldehyde を dd 系雄マウスを用いて動物実験を行った結果、睡眠延長作用、体温降下作用、解熱作用、鎮静作用の緩和な中枢抑制作用が認められた。その作用発現の量は LD₅₀ の1/2以下で、生薬中に約1%の cinnamic aldehyde が含まれていることは、その治療効果発現に十分な意味があるものと思われる。

〔薬味、薬性〕辛、甘。温。

〔薬能〕桂枝（桂皮）は上行、發表の作用があり、風寒を解し、四肢に横走し、経を温め、絡を通ず。白芍を配合すると能く表虚邪実の症を理し、営衛を調和し、表を解し大汗の弊害がない。甘草を配すると心悸を止める。杏仁、厚朴を配すと気を下し、咳を止める。麻黄、附子を配すると経を温め、痛みを止める。当帰、芍薬を配合した方剤は活血通経による。茯苓、朮を配合した方剤は陽を通じ、水を利用し、痰飲を化す。

〔用途〕健胃、駆風、矯味、発汗、解熱、鎮痛薬として、中枢神経系の興奮を鎮静し、水分代謝を調節し、体表の毒を去り、これを和解する作用があるから、頭痛、発熱、のぼせ、感冒、身体疼痛などに応用する。また桂皮油の製造原料とする。薬用のほか京都名産八ツ橋などの菓子類の矯味剤としても賞用される。

〔処方例〕桂枝湯（73）、桂枝加芍薬湯（68）、苓桂朮甘湯（296）、桂枝生姜枳実湯（傷寒、金匱：桂枝、生姜、枳実）、桂枝芍薬知母湯（金匱：桂枝、知母、防風、生姜、芍薬、麻黄、朮、甘草、附子）、桂枝茯苓丸（75）、桂枝桃仁湯（婦人良方：桂枝湯＋桃仁、地黄）。

牡桂味辛温。生山谷。治上氣欬逆。結氣。喉痹吐吸。利關節。補中益氣。久服通神。輕身不老。

本草綱目 (李時珍、国訳・本草綱目)

牡桂 (本經上品)

和名 ほんにくり (香櫨)
學名 *Cinnamomum Casala*, Bl.
科名 くすのき科 (樟科)

桂(別錄) 時珍曰く、これは即ち肉桂であつて、厚くして辛烈である。粗皮を去つて用ゐる。その内外皮を去つたものが即ち桂心である。

氣味 【甘く辛し、大熱にして小毒あり】 權曰く、桂心は苦く辛し、毒なし。

元素曰く、肉桂は、氣は熱、味は大辛にして純陽である。

杲曰く、桂は辛し、熱にして毒あり。陽中の陽であつて浮である。氣の薄きものは桂枝である。氣の厚きものは桂肉である。氣が薄ければ發泄するもので、桂枝は上行して表を發する。氣が厚ければ熱を發するもので、桂肉は下行して腎を補する。これは天地の上に親しみ下に親しむの道である。

好古曰く、桂枝は足の太陽の經に入り、桂心は手の少陰の經の血分に入り、桂肉は足の少陰、太陰の經の血分に入る。細く薄きものは枝であり嫩であり、厚脂のもの

(9)成分 薬局方のケイヒは精油一―三・四%のほかシヨ糖、転化糖、粘液、ゴム質、タンニンなどを含み、灰分一―五%。精油はケイアルデヒド八〇―九〇%のほかケイアルコール酢酸エステル、ヒドロケイアルコール酢酸エステルなどからなる。『日局八解』C―六七七。(素)

のは肉であり老であり、その皮と裏とを去つてその中に當るものは桂心である。別録に、小毒ありといひ、又、久しく服すれば神仙となり、老いずとあるが、小毒はあるにしてもやはり類に従つて化するもので、黄芩、黄連と共に使とすれば小毒がその働をなせるものでない。烏頭、附子と共に使とするはその熱性を取るだけである。巴豆、硫砂、乾漆、穿山甲、水蛭等と共に用ゐるならば、小毒は化して大毒となる。人參、麥門冬、甘草と共に用ゐるならば、中を調へ、氣を益す。そこで久服されるのである。

之才曰く、桂は人參、甘草、麥門冬、大黃、黄芩と配合すれば中を調へ、氣を益す。柴胡、紫石英、乾地黄と配合すれば吐逆を療ずる。生葱、石脂を忌む。

主治

【肝、肺の氣を利す。心腹寒熱、冷痰、霍亂、轉筋、頭痛、腰痛。汗を出し、煩を止め、睡を止める。欬嗽、鼻鼈。胎を墮す。中を溫め、筋骨を堅くし、血脈を通じ、不足を理疏し、百藥を宣導し、畏るところのものなし。久しく服すれば神仙となり、老いず】(別錄) 【下焦不足を補し、沈寒痼冷の病を治し、滲泄し、渴を止め、營衛中の風寒を去る。表虛自汗には春、夏は禁藥である。秋、冬の下部腹痛はこれ以外では能く止め得ない】(元素) 【命門不足を補し、火を益し、陰を消す】

(好古)

【寒痺風瘡、陰盛失血、瀉痢、驚癇を治す】(時珍)

(10) 丹陽は江蘇省句
容県。(考定者)

桂心(藥性論) 數曰く、紫色にして厚きものを用ゐ、上の粗皮、并に肉の薄皮を去り、心中の味辛きものを取つて用ゐる。中國にはまた桂草といふがあり、それで丹陽木皮を煮て桂心の偽物に充てる。

時珍曰く、按ずるに、酉陽雜俎に『丹陽の山中に山桂といふがある。葉は麻のやうで細黄の花を開く』とある。これが即ち雷氏の所謂丹陽木皮である。

氣味

【苦く辛し、毒なし】前の桂の項に詳記してある。

主治

【九種の

心痛、腹内の冷氣痛で忍び難きもの、欬逆、結氣、壅痺、脚痺不仁。下痢を止め、三蟲を殺し、鼻中の息肉を治し、血を破り、月閉、胞衣不下を通利する。【一切の風氣を治し、五勞七傷を補し、九竅を通じ、關節を利し、精を益し、目を明にし、腰膝を暖め、風痺、骨節攣縮を治し、筋骨を續ぎ、肌肉を生じ、瘀血を消し、疥癬、癩癧を破り、草木の毒を殺す】(大明) 【風僻失音、喉痺、陽虛失血、内托癰疽、痘瘡を治し、能く血を引き、汗を化し、膿を化し、蛇虺の毒を解す】(時珍)

杜桂(本經) 時珍曰く、これは即ち木桂であつて、薄くして味淡い。粗皮を去つて用ゐる。その最も薄きものが桂枝であり、枝の嫩小なるものを柳桂といふ。

氣味

【辛し、温にして毒なし】權曰く、甘く辛し。元素曰く、桂枝は味辛

く甘し、氣は微熱である。氣味俱に薄く、體は軽くして上行し、浮にして升る。陽である。その他は前の單桂の項を見よ。

箇桂味辛温。生山谷。治百疾。養精神。和顏色。爲諸藥先
娉通使。久服輕身不老。面生光華。媚好常如童子。

主治 「上氣、欬逆、結氣、喉痺、吐吸。關節を利し、中を補し、氣を益す。

久しく服すれば神を通じ、身を軽くし、老いず」(本經) 【心痛、脇痛、脇風。筋を温め、脈を通じ、煩を止め、汗を出す】(別錄) 【冷風疼痛を去る】(甄權) 【傷風頭痛を去り、腠理を開き、表を解し、汗を發し、皮膚の風濕を去る】(元素) 【奔豚を泄し、下焦畜血を散し、肺氣を利す】(成無己) 【手臂に横行して痛風を治す】(震亨)

葉 (12) **主治** 【擣き碎いて水に浸し、髪を洗へば垢を去り、風を除く】(時珍)

(12) 桂葉、すなわち C. Cassia Bl. の葉であるが、現在「桂葉」と称する市場品の生薬はなく、むしろ、桂皮油の原料とされることが多いから採油したものは秘密には Cassia leaf oil として桂皮油 Cassia oil と區別している。なおせんロン桂皮ならびにその葉から採る精油も連香、桂皮油としているが、これも秘密には Cinnamon oil と區別している。また、市場には「桂葉」と称するものがあり、恐らく桂皮油を採るときに葉の部を取り除き、これだけを乾燥したものと考えられる。薬用に耐えないのであるが、粉末として桂皮末 C. Cassia powder 中に含まれる(木通)ことがある。

(1) 月桂 ヤブニツケイ *Cinnamomum japonicum Siebold* 日本および中国中部に分布する。陳腐「中国樹木分類学」三三五ページにこれを用桂、天竺桂にあてている。浙江省の杭州靈隱寺の木についた名であるから適當であると考ふる。(北村)

(1) 月桂 (拾遺) 和名未詳 學名 *Cinnamomum sp.* 科名 *クワナナ科 (樟科)*

子 (7) 氣味 【辛し、温にして毒なし】 主治 【小兒の耳後の月蝕瘡に、研

り砕いて傳ける】(藥考)

種子の脂肪は肉桂酸 *cinnoyl* と *cinnamyl* と呼ばれ、かつてカカオ脂の代用とされ 量は *oleic acid, myris* 主成分は *esterole* *steroid, camphor* も含まれるがケイアルデヒドは見出されない。広川薬用植物大事典「二六六ページ(兼)

本草備要 (王昂、文光圖書公司印行本および寺師睦宗 訓)

辛甘而温氣薄升浮入太陰肺太陽膀胱經温經通脈發汗解肌 能利肺氣經曰治傷風頭痛 能發汗 中風自汗 有汗能止中猶傷也古文通用自汗瀉湯謂桂枝為君芍藥甘草為佐加姜棗名桂枝湯能和榮實表 調和營衛使



桂枝

(經解心通考)

邪自汗出而汗自止亦治手足痛風脇風 痛風有風痰

血氣虛血虛之異桂枝用作引經助陽歸肝桂能平肝東垣曰桂枝橫行手臂以其為枝也又曰氣薄則發泄桂枝上行而解表氣厚則發熱肉桂下行而補腎王好古曰或問桂枝止煩出汗仲景治傷寒發汗數處皆用桂枝湯又曰無汗不得用桂枝汗多者桂枝甘草湯此又能解汗也二義相通乎曰仲景云太陽病發熱汗出者此為營弱衛強陰虛陽必溼之故以桂枝發其汗此乃調其營氣則衛氣自和風邪無所容遂自汗而解非若麻黃能開腠理發出其汗也汗多用桂枝者以之調和營衛則邪從汗出而汗自止非桂枝能閉汗

孔也○亦惟自汗者宜之若傷寒無汗則當以發汗為主而不獨調其營衛矣故曰無汗不得服桂枝自汗不得服麻黃也復原曰桂枝下泄陽感則寒又承氣入胃陰感則亡耳

27 桂枝 (輕、解肌、調營衛)

- ① 辛甘ニシテ而溫、氣薄ク升浮ス。
- ② 入ニ太陰肺、太陽膀胱經ニ。
- ③ 溫ノ經ヲ通シ脈ヲ、發シ汗ヲ解ス肌ヲ。
- ④ 治ス傷風頭痛、中風自汗一。
- ⑤ 調ニ和ス營衛ヲ、使メ邪ヲ從レ汗ニ出ス、而汗自止ム。
- ⑥ 亦タ治ス手足痛風脇風一。

辛甘大熱氣厚純陽入肝腎血分補平肝腎補命門相火之衰兩腎中間先天阻氣乃真火也人非此火不能有生無此益陽消陰治痼冷沉寒能發汗疏通血脈宣導百藥辛

(大燥補腎生火)



去營衛風寒表虛自汗虛陽腹中冷痛效逆結則通行

氣效逆亦由氣不歸元桂能引火歸命門木得桂而枯創桂釘木根其木即死又能抑

肝風而扶脾土肝木盛則桂土辛從治目赤腫痛以熱

及脾虛惡食命火濕盛泄瀉土為木耗不能防水古

補勞明目通經墮胎辛熱能動出嶺南桂

州者為良桂州名色紫肉厚味辛甘者為肉桂入肝腎去粗皮用其毒去裏外皮當

中心者為桂心心枝上嫩皮為桂皮入肺膀胱得人參甘草麥冬良忌生葱石脂

本草有桂枝筒桂枝壯桂枝之類今用者亦罕分別惟以肉桂氣香者良

肉桂 (大イニ燥シ、補ニ腎命ノ火ヲ)

① 辛甘大熱、氣厚ク純陽。

② 入ニ肝腎血分ニ、補ニ命門相火之不足ヲ。

③ 益シ陽ヲ銷シ陰ヲ、治ニ沈寒錮冷之病ヲ。

④ 能ク發シ汗ヲ、疏ニ通シ血脈ヲ、宣ニ導ス百藥ヲ。

⑤ 去ニ營衛風寒、表虛自汗、腹中冷痛、欬逆結氣ヲ。

⑥ 木得レテ桂ヲ而枯レ。又タ能ク抑ニ肝風ヲ而扶ニ脾土ヲ。

⑦ a) 從ニ治ス目赤腫痛、

b) 及ビ脾虛惡食、濕盛泄瀉ヲ。

⑧ 通シ經ヲ墮レ胎ヲ。

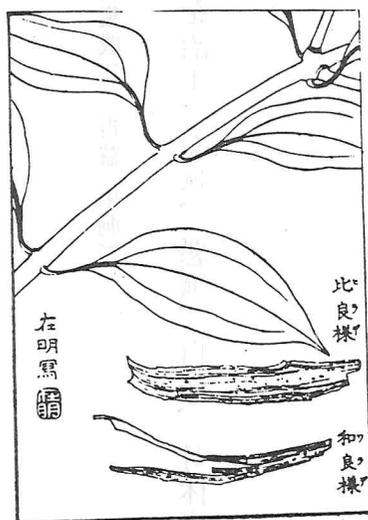
⑨ 出ル嶺南、桂州ニ者ハ良シ。

⑩ 色紫ニテ肉厚ク、味辛甘ノ者ハ爲ニ肉桂ト。

⑪ 去リテ粗皮ヲ用フ。

⑫ 去ニ裏外ノ皮ヲ、當ニ中心ニ者ハ爲ニ桂心ト。枝上ノ嫩皮ハ爲ニ桂枝ト。

⑬ 得ニ人參・甘草・麥冬一良シ。忌ニ生葱・石脂ヲ。



(藥補陽活血)



桂心 (燥、補_レ陽_ヲ、活_ス血_ヲ)

- ① 苦_ハ入_ル心_ニ、辛_ハ走_ル血_ニ。
- ② 能_ク引_キ血_ヲ化_シ汗_ニ化_シ膿_ニ、内_ニ託_ス癰疽痘瘡_ヲ。
- ③ 消_シ瘀_ヲ生_ス肌_ヲ。
- ④ 補_ニ勞傷_ヲ、煖_ニ腰膝_ヲ、續_ク筋骨_ヲ。
- ⑤ 治_ス風痺癥瘕、噎膈腹滿、腹内冷痛、九種心痛_ヲ。

藥 微 (吉益 東洞、西山 英雄 訓詁 未收載生薬は近世・漢方医学書集成二 吉益 東洞)

四四、桂 枝 上衝を主治す。故に奔豚、頭痛、冒悸を治す。発熱、惡風、自汗、身体疼痛、骨

節疼痛、絳水の變を兼治す。

苦入心辛走血能引血化汗化膿内託癰疽痘瘡疔

益精明目消瘀生肌補勞傷煖腰膝續筋骨

治風痺癥瘕噎膈腹滿腹内冷痛九種心痛

四_一五_二食_三六_四飲_五七_六冷_七八_八熱_九去_十九_一來_二痛_三皆_四
邪_五乘_六於_七少_八陰_九之_十絡_一邪_二正_三相_四激_五故_六令_七心_八痛_九

古方藥品考卷之一

平安 內藤尚賢剛甫 著

薩州 篠原篤慶士光 校

桂枝前鋒發表宰宗。和漢通名。

名醫別錄曰桂味甘辛大熱主利肝肺氣心腹寒熱

冷痰霍亂轉筋頭痛腰痛出汗止煩止唾欬嗽堅筋

骨通血脈理疏不足宜導百藥無所畏愚案桂之為

物純陽發散其枝之性自達乎表部皮之性自走乎

肌膚味辛熱甘和而有芳發之氣以善致發表前鋒

也故仲景氏不用肉桂而專用桂枝者取其枝皮以

利發表之義矣其麻黃湯木小青龍葛根湯等有發

表之功者。皆因桂枝之力。而所致也。故以此為發表之宰宗也。

桂枝湯太陽病。頭痛發熱。汗出惡風。○太陽病外證

未解。脈浮弱者。當以汗解。案風邪受于表。必先發表。為順。故用桂枝以發散表。

邪芍藥以順血。固肌。生姜以開腠。達藥力。大棗以溫保胃。氣甘草以協和諸藥也。

肉桂溫中宣導百功。

案肉桂即桂幹皮。氣味辛甘大溫。故能溫中。宣導

諸藥之能功也。

蜀椒閉口者有毒。誤食之。戟人咽喉。氣閉欲絕。云

肉桂煎汁飲之。

桂 枝 けいし 又名桂皮 別名陽旦

品考 桂樹の皮なり、セイロンは一名を皮去りと謂ふ、廣南は普通かんなん又は但桂皮と云ふ、肉桂はニッケイ、皮甚だ厚き物なり、其の他桂の細枝を皮毎剉みたる品あり、以上は皆支那産なり、本邦産には、チリチリ、小巻、揚子巻等の種類あり。

セイロンは概ね數十枚を重ねて一束と爲したる物にして長さは一尺餘り各枚は半管狀又は管狀をなし幅は平均五分内外厚味は一二厘より一分に至る、色は新鮮なる品は赤褐色古びたる物は稍黒味を帶ぶ、質は堅くして折れ易く氣味は甘美にして灼くが如し、薄手のもの味よく厚き物には良からざる品多し、通常二斤入れ一袋として賣買せられたるも現今は見ず。

肉桂は玉桂の一種にして巻狀又は半巻狀をなし厚さ一二分より三四分に至る長さは不同なれども大低尺を超えず、外面は漚の木の皮の如く内面は平滑にして赤褐色なり、外部は殆ど無味なれど内面は中紫黒色を帶び佳快灼くが如き甘味あり、其の内部のみを剥ぎ取りたる物を特に桂心と云ふ、但し市場で俗に桂辛と呼ぶる物とは大いに異なる市場の桂辛は邦産桂樹の地上部の皮のことにして香りあれ共甘辛の味乏しく極めて下品の物なりと聞く、混同すべからず。廣南桂皮は肉桂の如き外皮を付けたれ共皮甚だ薄く氣味セイロンより少しく薄し、但櫻皮と呼ばはる品は薄手なれ共甚上品にして氣味の佳快なる事セイロンの遠く及ばざる品なり。邦産桂皮は少しく樟腦を加へたるが如き爽快なる香りあり味甘けれ共微に澁味を帶ぶ。

撰用 氣味厚き物なれば何れにても可なり、但肉桂は養生用に多く使用せられ一般薬用には餘り用ひられず之れ値段の甚だ高價なるとその枝部に非ざるとを以てなり然れども桂枝の無き場合には應用して可なり。

用法 剝み用ふ、皮厚きものは皮を除きて用ふ之れ桂皮の味は皮の内側に在るが故とす。

桂枝皮を去るとあるはその外側の味なき所を去るの謂なり、又皮をケヅルにはまめそりんな豆反鉤便利なり。又其の粉末は氣味の失せ易き物なり密栓して貯ふべし、成るべくは用に臨みて造るが一番なり。

効用 本經に曰く味辛温、上氣欬逆結氣喉痺吐吸を主どり關節を利し中を補ひ氣を益し久服すれば神に通じ身を軽くし老させずと。

藥徴に曰く桂枝主治衝逆なり旁ら奔豚頭痛發熱惡風汗出身痛を治すと。ボク曰く桂枝は味辛温、汗を發し表を調ふ、又衝逆を主どると謂はる、衝逆とは下から上へつきあぐる勢ひを云ふ動悸頭痛息切れ肩のはり等此衝逆より生ずる者あり、表の陽氣虛する時はよく此衝逆を發す桂枝よく表を救ふ故に斯く稱するものなるべし。又山椒の毒を解すに用ひらる。

漢藥の臨床應用 (神戸中医学研究会 訳・編)

2 桂枝 (けいし)

処方名 桂枝・桂枝尖。

基原 クスノキ科 Lauraceae 桂樹 *Cinnamomum cassia* Blume (ケイ) の若枝を乾燥した

もの。枝先が桂枝尖で、氣・味・色ともに濃厚で、溫經通路の効能が桂枝より強い、性味 味は辛・甘、性は溫。(歸經：心・肺・膀胱經)。

主成分 主に cinnamic aldehyde C_9H_8O ・cinnamyl ethyl acetate などを含む cincol.
薬理作用 発汗解表・温通経脈・通陽化氣。

(1) 解熱：cinnamic aldehyde は、解熱し⁶⁾・皮膚血管を拡張し・血液循環を調整して血流を体表にむかわせるので、熱の放散と発汗に有利である。この作用のことを温経通絡、透発熱氣という。ただし、桂枝の解熱・発汗作用は非常におたやかなので、中医は経験的に“桂枝は他の解表薬と配合することによってはじめて発汗し、収斂薬と配合すると止汗にもなる”としている。

(2) 鎮痛：大脳の知覚中枢に作用して疼痛閾値をたかめることによって鎮痛効果をあらわす。頭部の血管痙攣による頭痛を、血管の痙攣をゆるめることによって緩解する。また内臓平滑筋の痙攣をゆるめて腹痛を緩解する。

(3) 健胃：唾液と胃液の分泌を促進して消化を助ける。

(4) 抗菌：in vitro で、アルコール浸出液には黄色ブドウ球菌・チフス菌などに対し顕著な抗菌作用がある⁶⁾。

(5) 抗ウイルス：in vitro で、煎汁にはインフルエンザウイルスに対し強力な抑制作用がある⁷⁾。

(6) 抗真菌：in vitro で、シェーソライソ白黴菌などの真菌に対し抑制作用がある⁸⁾。
臨床応用

(1) 外感風寒に用いる。桂枝の発汗作用は麻黄よりおたやかで、生姜を配合し・服薬後に熱粥をすすらせてはじめて発汗することが多い。方剤はたとえば桂枝湯である。とくに虚弱体質のものが感冒にかかったときに適している。

桂枝は温熱性の薬物で血行を促進するため、風温などの発熱性伝染病で、熱が高く・脈が洪大で・汗が出ないときには使用してはならない。もしあやまって用いると、0.5~1g 使用しただけで鼻出血をおこす。口や舌の乾燥・吐血・咯血などの症状がある陰虛内熱のときは、とくに桂枝を用いてはならない。

(2) 風湿による痺痛*、とくに肩や上肢の関節痛（関節リウマチ・神経痛など）に対し、桂枝の温経止痛の効能を利用する。とくに虚弱者の風寒による痺痛に適しており、桂枝湯だけで効果があることもある。風寒がひどいときには、麻黄・附子などを配合する。方剤例、桂枝附子湯。

(3) 水湿の停滞による水腫・痰飲（慢性気管支炎などで気道にたまった大量の分泌物など）に用いる。古人は経験的に、“桂枝には通陽利水（化氣行水）の効能があるので、水腫・痰飲に効果がある”としている。現代医学的にみると、“陽”と“氣”はどちらも機能をあらわすもので、通陽利水・化氣行水とは、血液循環機能を促進し、発汗と利尿の作用を強めることによって局所の体液停滞を軽減することである。桂枝はこのような作用をそなえているが、茯苓・白朮などの利水・化湿の薬物を配合してはじめて顕著な効果があらわれることが多い。方剂例、苓桂朮甘湯。

このほか、桂枝は婦人科や他の疾病にも広く応用する。たとえば、当帰・白芍を配合して活血通經し、虚寒による月經不順・無月經などに使用する（注意：月經過多には禁忌である）。甘草を配合すると動悸に効果がある。腹痛をともなう虚寒性の下痢（慢性結腸炎など）には、止瀉の方剂中に桂枝を加えると効果がある。中国南部では、夏季の湿気のために身体が重だるいときに、桂枝の煎液で体を洗うと爽快になるとされている。桂枝湯加減の用途はさらに広い。

用量 常用量は3～9g。解表に用いるときは、少量で2～5g、一般に6g。風湿による関節痛には比較的少量で、甚だしいときには30～45gを用いるが、具体的な状況と臨床経験によって決める必要がある。

方剂例

- (1) 桂枝湯（《傷寒論》）：桂枝6g 白芍9g 炙甘草6g 生姜9g 大枣6g 水煎服。
- (2) 桂枝附子湯（《金匱要略》）：桂枝9g 白芍9g 附子9g 炙甘草6g 大枣6g 生姜9g 水煎服。
- (3) 苓桂朮甘湯（《傷寒論》）：桂枝9g 茯苓15g 白朮12g 炙甘草6g 水煎服。

* 第五章前文参照。

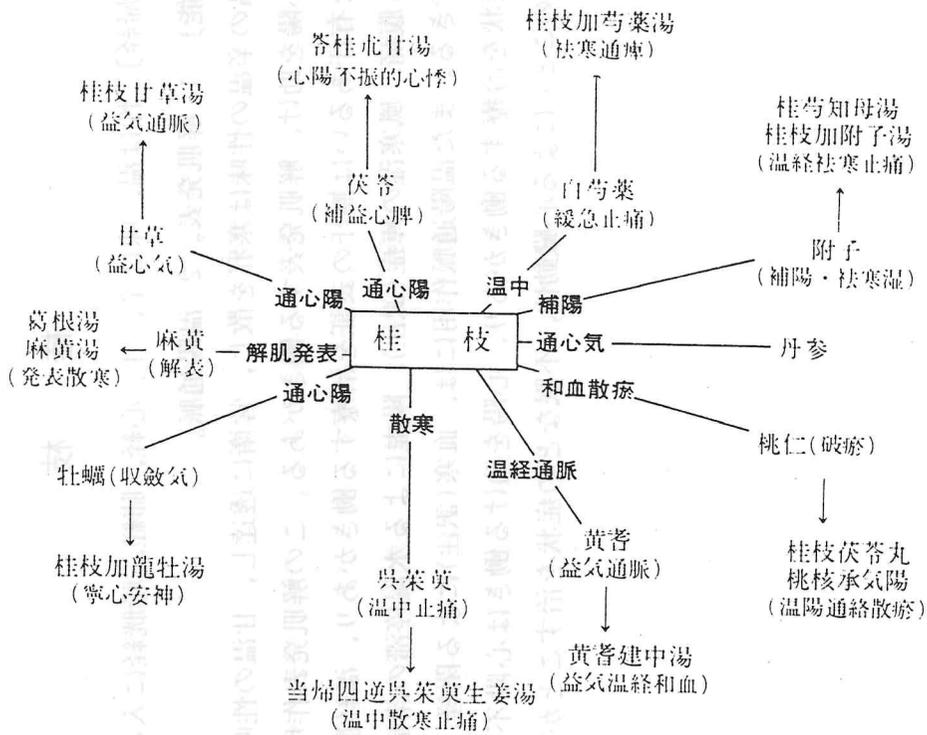
桂 枝

〔性味帰経〕 性は温，味は辛，甘。心経，肺経，膀胱経に入る。

〔効能〕 1 解肌發表。 2 温陽通脈。

本品の辛温の性味は寒邪を散じ，營衛に透達し，甘温の性味は血脈を温通して心陽を助け，解肌發表する働きがある。この解肌發表作用は，風寒に外感した有汗あるいは無汗の表証を治療する働きがあり，温経散寒作用は虚寒による腹痛，風寒湿の痺症（訳注），陽虚による水湿停滞の諸症を治療することができる。また温陽通脈作用には，血瘀（訳注）による閉経，下腹部張痛などの症状を治療する働きがあり，心陽を助ける働きは心陽不振（*心臓の衰弱などのこと）による心臓動悸，不眠などの症状を治すことができる。

〔配合応用〕



〔常用量〕 3g～9g

〔禁忌〕 本品は陽盛陰虚（訳注），及びすべての出血性疾患には注意して用いる。

〔参考〕 本品はクスノキ科の植物肉桂ホンニクケイ（*Cinnamomum cassia* Bl.）の若枝である。

本品は揮発油を含有し，その主成分は桂アルデヒドである。このほか桂アルコール酢酸エステルとヒドロ桂アルコール酢酸エステルがある。これには鎮痛，強心，健胃の効能があり，また汗腺の分泌を刺激して皮膚の血管を拡張し，発汗させて熱を除く作用もある。桂皮チンキは炭疽杆菌，黄色ブドウ球菌，赤痢菌及びサルモネラ菌の働きを抑制する作用がある。

ケイ(桂)類 I

●中国名 肉桂類 (rou gui lei)
 ●学名 *Cinnamomum species*
 ●英名 Cinnamon plants
 日本大学名誉教授 滝戸 道夫

滝戸 道夫

私達人間が古くから香辛料や薬として利用してきた植物はたくさんあるが、最も古いものはケイ(桂)の仲間であるといわれている。紀元前五〜四千年頃メソポタミアで興ったシュメルの文化の象徴、楔形文字で書いた粘土板に西南インドから伝えられたと思われるケイの名が刻まれ、古代エジプトに伝わり、

医学、薬学全書である紀元前五五〇年頃のエーベルスの古文書 (Ebers Papyrus) に見られ、ギリシャの香辛料、医薬品として引継がれ、薬学者の始祖といわれるデイスコリデスの著書『ギリシャ本草 (De Materia Medica)』(七八)に記載されている。やがてケイの仲間はヨーロッパ全域やアメリカに広ま

り、シナモン (cinnamon) と呼ばれ、現在は主にセイロン桂皮を輸入して利用している。また、東アジアには紀元前二五〇〇年頃にはすでにインドから中央アジア、シルクロードを

通って中国に伝わったといわれ、最も古い字書『爾雅』(周から漢の時代の書) にケイは棧の名で記されており、この棧(シン)の字は cinnamon の音訳字であるといわれる。後漢時代(二五〜二二〇)には中国最古の本草書『神農本草経』や漢方医学中の湯液分野の最古の文献とされる『傷寒雑病論』に記載され、今日まで連綿として中国医学の重要な薬物とされている。日本への導入は江戸時代初期で、幕府の御薬園で育生、栽

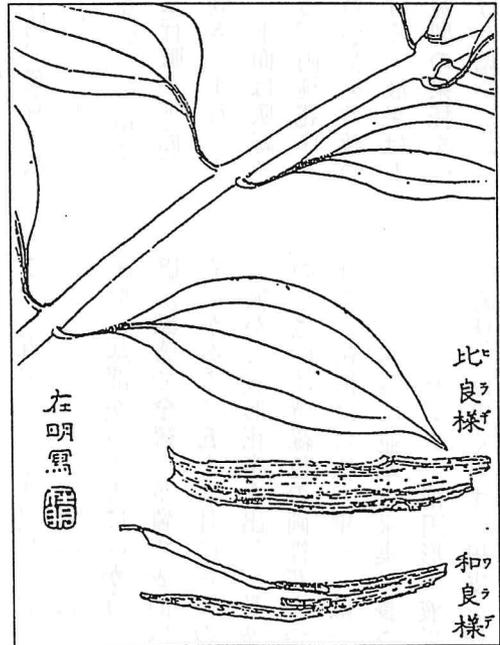
培化を試み、ニツケイの栽培に成功し、幕末から近年まで鹿児島、高知や和歌山県などで相当量の生産があった。その根の皮は薬や香辛料として利用されたが、最近では生産料が激減している。

京都のおみやげ、短冊形に焼いた聖護院の名菓八ッ橋、これがニツケイの香味である。今は生八ッ橋もあるが、琴形で砂糖と桂皮(輸入ケイ類の樹皮やニツケイの根皮)が入った堅焼の煎餅が昔からの味だ。子どもの頃、駄菓子屋の

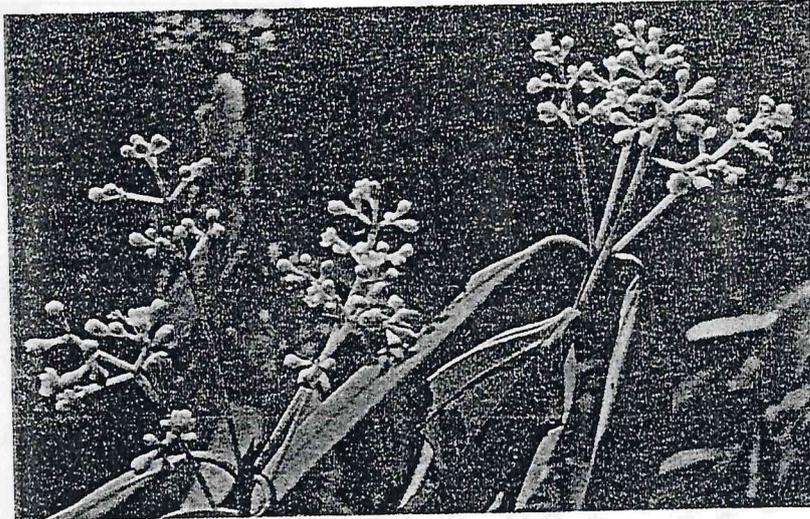
店先で齧った細いニツケイの根を赤い糸で束ねた「ニッキ」や鼻水を吸りながら嘗めた「ニツキあめ」の味が懐かしい。

ケイ類は双子葉植物、クスノキ科、クスノキ属 *Cinnamomum* の植物でインドからアジアの熱帯、温帯およびオーストラリア北部に約二五〇種が分布する常緑の高木で日本にはニツケイ (*C. sieboldii*) が徳之島や沖縄本島に野生化し、暖地の各地に植えられており、マルバニツケイ (*C. daphnoides*) が九州南部から沖縄諸島に植栽され、また、ヤブニツケイ (*C. japonicum*) が宮城県以南に分布している。

中国には三〇種余りが自生ま



▲ニツケイ 『詳解古方薬品考』より



▲ホンニッケイ (『中国本草図録』より)



▲セイロンニッケイ

たは栽培されており、主なものにはホンニッケイ(ケイ、トンキンニッケイ、肉桂 *C. cassia*)、陰香 (*C. burmannii*)、狭葉陰香 (*C. burmannii* var. *angustifolium*) やセイロンニッケイ (錫蘭肉桂 *C. verum*) が、インドにはタマラニッケイ (*C. tamala*) やセイロンニッケイが、インドネシアには *C. burmannii* や *C. sintoe* な

どが自生している。なお、クスノキ (*C. camphora*) も同属の植物であるが含有成分が異なるのでニッケイ類には入れない。中国名でクスノキは樟でありケイは桂である。
ホンニッケイは中国の浙江、福建、広東、広西省やインドシナ半島に分布し、栽培されている常緑の高木で、高さ十二〜十

七メートル、樹皮は灰褐色で若枝は四稜であることが特徴である。葉は互生、有柄、葉身は広針形で長さ八〜十七センチ、全縁(ギザギザがない)で革質、先端まで達する三行脈が下面で明瞭、細脈は横向きで平行、上面は光沢があり、下面は灰緑色で細い柔毛がある。円錐花序を頂生し、黄緑色の小花を多数つける。液果はお

椀型の果托をつけた楕円状で、長さ約一・二センチで暗紫色である。花期は五〜七月、果期は二〜三月である。樹皮や若枝から生葉の肉桂や桂枝を作る。ニッケイは高さ一〇〜一五メートル、直径は通常四〇〜五〇センチ、一メートルにもなる。樹皮は灰黒色で、薄片状に剥

げる。小枝は暗緑色、葉は互生またはやや対生する。葉柄は長さ一・五センチ、葉身は暗緑色、長さ七〜一二センチで卵状長楕円形、基部から上方に向かう三脈が顕著で全縁、革質で表面は光沢がある。五〜六月に新枝の葉腋から散形花序を出し、数個の小さい淡黄緑色の両性花をつける。花被は六枚、雄シベは一、二個で四輪に並ぶ。果実は長さ約一・三センチ、楕円形の液果で晩秋には黒く熟す。根皮を桂皮の代用にした。幹の皮は線香などに用いられる。

セイロンニッケイは欧米ではシナモン (*cinnamon*) といわれてスパイスを作るために栽培される常緑樹で、高さは一〇メートルになる。葉は長さ一五〜二〇センチで卵形、光沢があり、三本の太い葉脈が特徴である。枝の先端部の葉腋から出る花序に黄白色で小さな花がたくさんつく。果実は約一センチで楕円球形で、花托はチューリップ状である。新生した若い枝の上皮を剥ぎ、乾燥して最も高貴な香りをもつシナモンといわれるセ



▲ ニッケイ (『草木図説』より)

イロン桂皮を作る。辛みはほとんどなく上品な香りと爽快な甘味がある。主産地はスリランカやセーシェル諸島で、世界中の熱帯で栽培されている。

また、タマラニッケイはヒマラヤ山麓から中国南部に分布する常緑の小高木で、インドでは葉を料理の香辛料にするという。また樹皮はシナモンの代用品となる。その外、インドネシアに生える *C. burmanni* や *C. sinise* などは昔からの民族の伝統薬として使われている。なお日本に生えるヤブニッケイは、高さ一五〜二〇メートルの常緑

の樹で、六月頃葉腋から出た花序に淡黄色の花を散形状に三〜六個つける。葉は濃緑色の革質で三行脈が目立つ。徳川時代に松浦肉桂と呼ばれたが、葉や樹皮はニッケイのような芳香に乏しく桂皮の代用にはならない。材はやや密で硬いので家具、器具や建築資材とし、薪炭に使われ、種子から得られる油脂をカカオ脂の代用品としたという。

「ケイ」は桂の音読みであるが、桂については『国譯本草綱目』(一九七三)の牡桂の釋名の項に、時珍(李時珍)、『本草綱目』の著者)曰く、「按ずる

に范成大の桂海志に「凡そ木の葉の心(葉脈か)はいづれも一縦理であるが、獨り桂だけは両道があつて圭(上が尖り下が四角な玉)の形のようなだ。故に文字は圭に従ふ」とある。これは桂の葉の脈が、真中の主脈の外に両側に二本の葉脈があるからであろうか。

前述の如く中国における「桂」の記載は『爾雅』に始まったとされるが、葉としては、最古の本草書『神農本草經』に上品として菌桂と牡桂の名が見られ、古方漢方の宝典『傷寒論』、『金匱要略』の多くの処方中に桂枝の名がある。『本草經集注』(五〇〇)には、菌桂、牡桂の外に桂のみの名があり、下つて唐時代の『新修本草』(六五九)には桂は牡桂であり、菌桂は筒桂であるとし、外に肉桂、桂枝、桂心、木桂や大桂などの名が出てくる。『本草拾遺』(七三九)には菌桂、牡桂、桂心の三種は同じく一物であるとし、また『蜀本草』(九三五〜六五)には新しく肉桂の名がある。宋の蘇頌(『図經本草』(一六〇二)の

著者)は「今では嶺表から産出するところを見ると、筒桂、内桂、桂心、官桂、板桂などの名があるが、醫家が用いては區別をつけることは罕^{まれ}である」といい、菌桂は今の筒桂、牡桂は今の官桂、桂は今の板桂であると述べている。また、李時珍は『本草綱目』の中で「桂には数種あつて、今参考し調査して見るに、牡桂は、葉は長く枇杷葉のようで、堅硬で毛、及び鋸齒(ギザギザ)があり、その花は色白く、その皮は脂が多い。菌桂は、葉は柿葉のやうで尖つて狭く、光浄で三縦文があつて鋸齒がなく、花は黄なるがあり、白きがあり、その皮は薄くして巻く。現に商人の販売するものはみなこの二桂である。但し、巻くものを菌桂とし、半巻のもの及び板なるものを牡桂とすることは明白であつて、……略」とあり、また桂は肉桂で内外皮を去つたものが即ち桂心であり、官桂は上等にして官に供する桂のことだ。と記している。これらの記述から中国の桂には種々の呼び名が時代の推移や使

片部分と加工法などによって作られてきたが、原料は一種類の植物の皮であろうと推察される。

日本での桂類の薬としての知識は古く、飛鳥時代に遣唐使や鑑真の来朝などから唐文化の一つとして現物とともに齎らされ、正倉院の現存する薬物三八品目中の一種として桂心の名で残されており、奈良時代には上級社会で輸入した薬物を利用していたことが判る。平安時代には日本最古の本草書『本草和名』(九一八)に菌桂と牡桂の名が見られ、『倭名類聚鈔』(九三二〜九三七)には桂の名とともに和名女加豆良が記載されているし、延喜式の典薬寮の部にも御薬、桂心の名がある。また、『今昔物語』(平安後期の著)に「京都の西洞院に桂の木があり、その木に童子を登らせて枝を取りらせ、桂心のある所を切り取り薬に使ったが、もろこしの桂心より勝れり」とある。この木が何であつたらうか。自生のヤブニッケイであると思われるが解らない。下つて吉野時代の『福

日フ』(一三三三)について「桂心辛辣者上品也。アラ皮ヲ削去テ、ウラノ味ヲ江テ使ヘ」と記されている。江戸時代初期の『多識論』(一六二二)には桂と菌桂(異名筒桂)天竺桂が記載されており、桂の和名に「加豆良」と記している。また、『本草辨疑』(二六八二)の桂の項に「今薬舗二四種アリ。肉桂、官桂、東京肉桂、桂心ナリ桂枝二品アリ只ノ桂枝(肉桂ノ枝ノ皮)トワラ桂枝(官桂ノ枝ヲ打ヒシキタル者)トナリ是官桂ト一種也」とあり、また、「桂心ト云者ハ和物ニシテ松浦桂心ト云者ナリ。(中略)日本ニ肉桂ノ木ト云者所々ニ之レ有リ、葉ハ「シキミ」ニ似テ桂ノ香モ少シアル者ナリ。松浦ト同種ナリヤ。松浦種ヲ見ザレバ決シ難シ」とある。このように当時種々の桂の種類があつて市場は混乱していたと思われる。したがつてその後出版された本草書である『大和本草』(一七〇九)、『和漢三才図会』(一七一一三)、『用薬須知』(一七二六)『一本堂薬選』(一七二九)など

る種類を比較、検討したものが多し。『薬徴』(一七七二)の品考の項では「桂枝、氣味は辛辣のものの上品となす。李杲「金時代『脾胃論』(一二四九)の著者」は氣味の厚薄を以て、桂枝と肉桂を分ち、遂に上行下行の説(氣味の淡いものが桂枝で、氣味の厚いものが肉桂で、桂枝は上向して表に働き、肉桂は下行して腎を補うという説)を構ふ。是れ臆測なり。従うべからず。桂枝や肉桂や桂心や、一物にして三名なり。桂心の説(桂心は表面がさがさして凹凸のある味のないところを削り去つたものだという説)は陳蔵器(前出の『本草拾遺』の著者)、李時珍之れを得たり。」とあり、『本草綱目啓蒙』(一八〇三〜六)では、市場には名は同じでも以前のものとは全く違つた東京桂、広南桂から選り分けた交趾桂、折桂枝、扁桂枝、草桂枝(柳桂)や紅毛肉桂などがあること、享保年間に南種桂が渡来し、諸州官園で繁茂していること、九州、四国には和産の桂があり、その

ること、今天竺桂の根皮を採つて売るものがあるが、香味ともに良いものであることなどを述べている。また『古方薬品考』(一八四一)では、市場に東京桂、広南桂、交趾桂、紅夷桂、根皮桂(邦産)、邦産桂枝、天竺桂などがあり、後の二種は薬にならないと述べている。なお前述の如く『本草綱目啓蒙』の記載文中に「享保年中南京種来り。今諸州官園ニ甚多ク繁茂ス」とあるが、上田三平著の『日本薬園史の研究』(一九七二)によると「享保(一七一六)より安政(一八五九)の間、数回にわたつて中国から渡来した記録があると記し、小石川御薬園の植栽記録として「寛政三年(一七九一)に唐船持渡の肉桂」とあり、また、「享保一〇年(一七二五)に東京産肉桂が長崎に來り、小石川及び久能山御薬園(静岡)に植えられたことが小石川植物園草木目録に残っている。」と記されている。肉桂の植栽記録では享保七年の小石川御薬園が最初で、外に長

崎、駿府、駒場の幕府御薬園、南部藩、鹿児島藩などの藩の御薬園、他に森野薬園や浜庭薬園などがある。

このように幕府は中国やベトナムなどから種子や苗を取り寄せて御薬園で植栽し栽培化を図ったが、桂類は熱帯性であったため仲々に困難であり、現存しているニッケイだけが成功し幕末には相当量生産されたと考えられる。したがって文章中の和産の桂や根皮桂はニッケイの根から作られたものであろうし、また東京桂、広南桂はホンニッケイの樹皮、紅毛桂、紅夷桂はセイロンニッケイの樹皮、交趾桂は現在の市場でいうベトナム桂皮であろうと思われる。また、天竺桂や松浦桂心は日本で自生しているものと考えられ、ヤブニッケイではないかと想像されるが、北村四郎先生は『本草の植物』の中で『海薬本草』「五代時代（九〇七〜九六〇）の李珣の著書に記載されている天竺桂は『本草拾遺』（一七六五〜一八〇三、道学敏の著書）の月桂と同一植物でヤブニッケイ

であるとしている。また松浦桂心については『資源植物事典』（一九四九）に、肥前の松浦でヤブニッケイの樹皮から作られたとある。また菌桂、牡桂、桂、官桂、筒桂の原料植物は皆ホンニッケイで、現在名は肉桂や玉桂であると記述している。

よくありませぬ。皮の薄くても色相のよい辛味の強いのは用いてよらしい。調製方。火に炙りあたたかなれば油分が吹き出でてまいります。其頃を見計らひて、差込みにて木口切になすのであります。」と記述されている。

樹皮で、多く秋に剥し取り、陰干する」としている。

生薬（桂枝、肉桂）の良否に

なお現行の日本薬局方には

ついては一色直太郎氏は『和漢薬鑑別法及調製方』（一九二九）

「ケイヒ（桂皮）」が規定されており、「Cinnamomum cassia

の中で、桂枝では「鑑別法。皮

を除いたもの」としており、

の薄い三四分位の廣さのものを

「中華人民共和国薬典」（一九九五）では「桂枝」と「肉桂」が

比良様と呼び、嫩い皮を和良様

規定されていて、前者は

又は柳桂と申します。総べて色

「Cinnamomum cassia Presl」の乾燥

相紫黒色で辛くて甘い香気のもの

若枝で、春夏二季採収し、葉を

いものが良品であります。調製

去つて陽干又は切片にして陽干

方。水に暫く浸してから引き揚

する」とあり、後者は

げ、水分を能くたらし一握りづ

「Cinnamomum cassia Presl」の乾燥

つ左手につかみ、差込にて長さ

三分位の木口切りに致します。

三分位の物是一本づつ木剪刀にて

平角製に切ります。」とあり、

肉桂については「鑑別法。皮の

厚い重みのある裏の紫赤色の油

分の多い味の辛く甘い香気の

稍々はげしい品がよいのであり

ます。裏面の黒味の帯びたもの

や、朽ちて辛味の抜けたものは

や、朽ちて辛味の抜けたものは

よくありませぬ。皮の薄くても

色相のよい辛味の強いのは用い

てよらしい。調製方。火に炙り

あたたかなれば油分が吹き出

でてまいります。其頃を見計ら

ひて、差込みにて木口切になす

のであります。」と記述されて



滝戸 道夫 (たきど・みちお)

大正十四年

昭和二十二年

昭和二十四年

昭和四十二年

現在

静岡県生まれ 星薬学専門学校(現・星薬科大学) 卒業

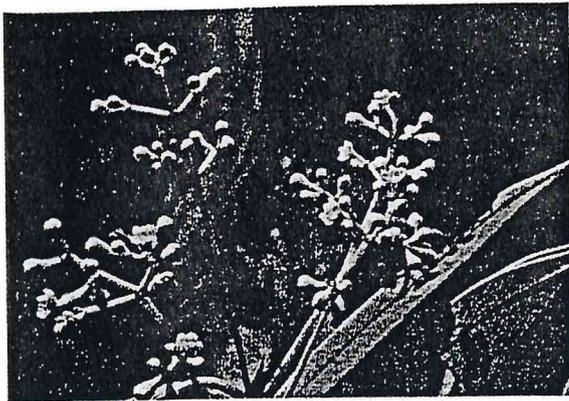
東京大学医学部薬学科選科修了

日本大学理工学部薬学科

(現・薬学部) 教授

日本大学名誉教授 薬学博士

東京大学総合研究博物館協力研究員



和漢薬の選品③〇

桂皮の選品

株式会社ツムラ 取締役研究総轄本部長

岡田 稔

すでに Dioscorides の『ギリシャ本草』に Kinnamon Cassia の名があり、使用前例は古い。『神農本草経』の上品に「菌桂」牡桂の二種を収載、以後の本草各書で詳述されている。『本草綱目』で李時珍は「凡そ木の葉の心はいずれも一縦理であるが、獨り桂だけは兩道があつて圭の過多のやうだ。故に文字は圭に従ふ——神農本經にはただ牡桂、菌桂だけがある。俗に用ゐる牡桂は扁廣にして殊に薄く、皮が黄で脂肪が甚だ少い——菌桂は正圓にして竹の如く三重なるものが良し——俗間にはまた半ば巻いた多脂なるものを單に名けて桂といひ、最も多く薬に入れてゐる。これが桂州にある三種である。この桂は廣州に出るものが好い——桂は即ち肉桂であつて、厚くして辛烈である。粗皮を去つて用ゐる。その内外皮を去つたものが即ち桂心である——」と記述が見られる。

わが国には正倉院に奉納された薬物の中に「桂心」の名で残され、後年、朝比奈泰彦、木村康一、柴田承二の諸博士の研究によつて、現在流通する桂皮と同様の種類であることが立証さ

れている。即ち天平勝宝八年(七五六年)に入つていたことになる。

中国西南部に自生し、高さ12mにも達する常緑高木となる。樹皮は灰褐色で、枝を叢出、葉は長さ1~2cmの葉柄を有し互生或いは対生し、長楕円形、広披針形及び披針形で長さ7~25cm、幅6~9cm、先端は尖り、基部は楔形で全縁、葉の下面に凸出した三分脈が明瞭で、上面は緑色、下面は帯灰緑色で、細かい毛がある。長さ8~16mmの円錐花序を腋生または頂生、大木に似合わず、径約3mm、白色、黄白色の小花である。發育雄蕊は九つで三輪、葯は矩円形で四室。外側の二輪は花糸に腺体がなく、花糸の基部に二腺体がある。果実漿果で楕円形から倒卵形、長さ約13mm、暗紫色、種子は長卵形で紫色である。

Cinnamomum cassia Blume が基原種で、樹皮(皮部)を薬用とする。古来、枝も薬用として生産され、桂枝の名が残るが、今は全て樹皮に限られる。中国国内広東、広西、四川、浙江、雲南など各省での栽培が確認されるが、わが国で用いられる薬用の桂皮は主として中国の広東

省、広西自治区産である(図1)。他に皮部が厚く、甘味があり、香りの強いベトナム産(*C. cassia*系統種)、味、においとも乏しいインドネシア、ジャワ、スマトラ地方に産し、栽培もされる *C. burmanni* 系統種、ネパール等に産する *C. tamala* 系統種もそれぞれの国、地域で市場性がある。又、欧米で香料として重用されるシナモンはスリランカに産する同属種 (*C. zeylanicum*) の樹皮である。

日本でもニッケイ (*C. Loureiri* 種) が栽培され、根皮を用いた時代がある。先人の「中国産は枝や幹の皮に辛味があり、日本のニッケイは根皮に多い」との経験によるもので、紀州産、土佐産を良しとして生産された記録がある。今でも紀伊三井寺、安房清澄山などの門前や縁日で売られている光景を目にすることがある。懐かしさを覚えるが時の流れ、漢方方劑への応用はない。

桂は現在、中国では「肉桂」日本では「桂皮」と呼んで同じものを名称を異にして用いられている。中国の市場では形状によつて、企辺桂、板桂、官桂、桂通、桂心、桂碎などと呼ばれ、

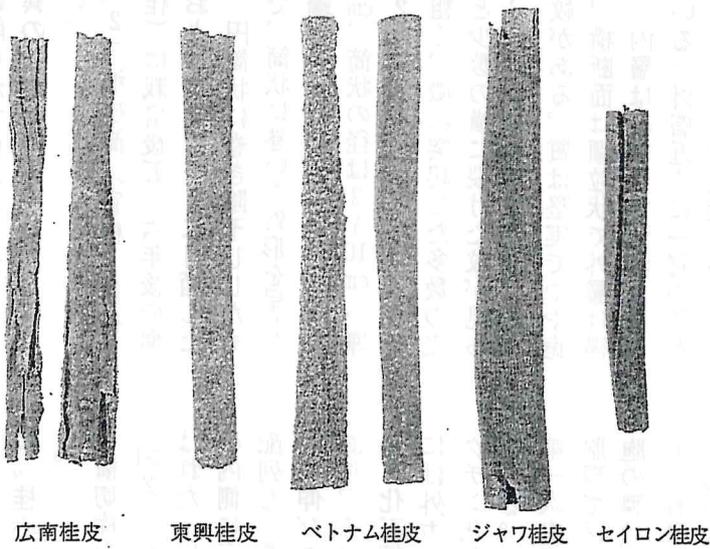


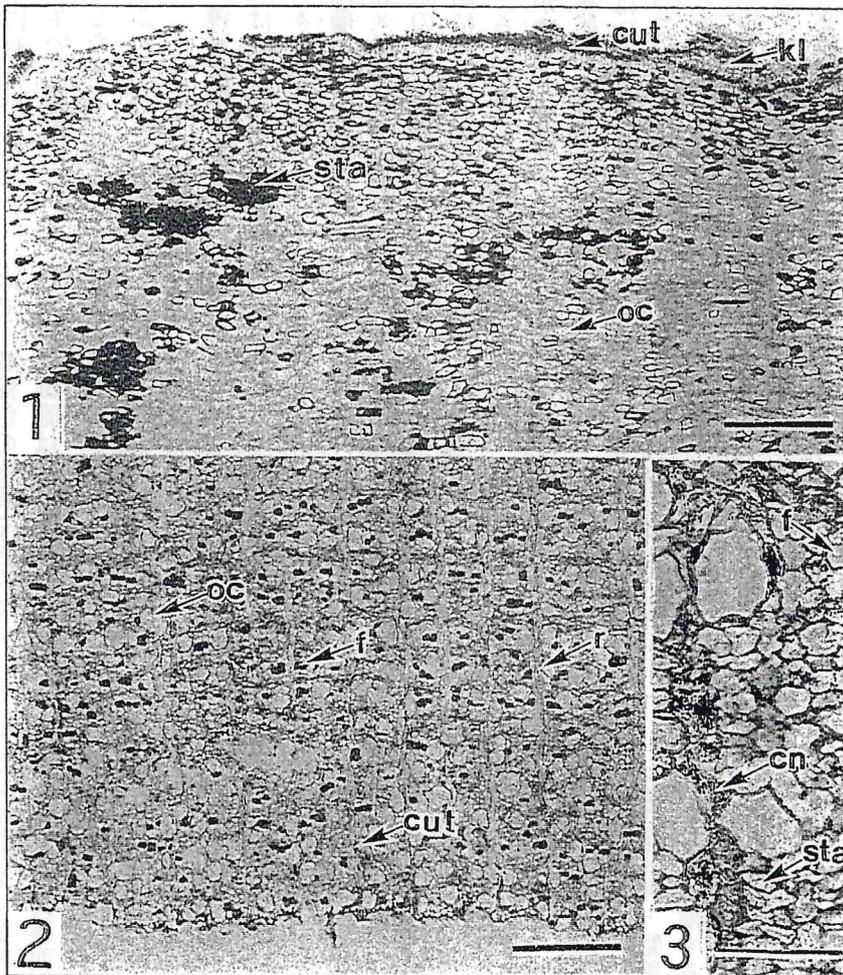
図1 桂皮

中国産やベトナム北部産を「広南桂皮」、ベトナム南部産を「安南桂皮」と呼称して流通される。
 セイロン桂皮として古代アラビアのサバ人 Sabaeen によって紀元前5世紀以前にインド、セイロンから南アラビアに持来された記事があるが二、三の論説があり疑わしく、事實は、一七五五年アラビア人カスウィニお

よひ一二九二年モンテコルヴィンがセイロンニッケイを記述し、産地、特性を明示しているのが正しいものと思われる。その後、ヴァスコダガマなどポルトガル人がセイロンに入り、野生するニッケイを採集し、食品へ応用、主要特産物として以後のセイロンでセイロンニッケイとして確立され、栽培にも成功、確固たる隆盛を築いている。

生薬の形質は半管状または巻き込んだ管状の皮片で、厚さ0.1~0.5cm、長さ5~50cm、径1.5cmである外面は暗赤褐色を呈し、内面は赤褐色を呈し、平滑である。破折しやすく、切面はやや繊維性で、赤褐色を呈し、淡褐色の薄層がある。特異な芳香があり、味は甘く、辛く、後にやや粘性で、わずかに収斂性である。収穫時期、調製方法

で分けている。
 (一) 企辺桂は一〇年を経た樹皮を剥いだもので両端がほぼ浅く内に巻いた桶状を呈し、長さ40~50cm、幅4.5~6cm、厚さ3~6mm、外面は暗赤褐色、褐灰白色、ときどき、突起した横紋と灰緑色の花紋が見られる。内面は褐色~赤褐色で指で削ると褐色の油紋がある。全体的に不規則な皮孔と多数の微かに突



1, 樹皮中央部から周辺部。2, 樹皮中央部から内側部。3, 柔組織拡大写真。
 スケールバー=1, 2; 500μm。3; 100μm。
 cn, シュウ酸カルシウム針晶。cut, クチン化細胞層。f, 繊維細胞。kl, コルク層。
 oc, 油細胞。r, 放射組織。st, 石細胞。sta, でんぷん粒。

図2 桂皮横切片鏡検写真

起した小瘤点があり、両端ともに約5mmコルク層の部分まで斜めに削られていることが多い。特異の芳香があり、味は甘く、辛い。

(2) 油桂筒(官桂、筒桂、条桂)は栽培後五〜六年後の樹皮および枝皮を一〜二日晒した後、円筒状に巻き陰干ししたもので、筒状に巻いた外形を呈し、両端を斜めに削られ、長さ30〜40cm、筒状の径は3〜10cm、厚さ2〜8mm。外面は灰褐色でやや粗く、微に突起した多数の皮孔と少数の横に裂けた紋が見られ、内面は赤褐色で平坦、細かい縦紋がある。質は堅実でやや脆い。横断面は顆粒状で外層は褐色、内層は紅褐色で油潤に満ちている。外層近くに一層の淡黄色を呈した石細胞環帯が見られる。特異な芳香があり、味は甘く、やや辛い。

(3) 板桂は老樹を30cmに環状に剥皮し、約九日間放置後、縦横を畳状にするように圧力をかけ、一ヶ月間乾燥し作り上げたものを板片状を呈し、両辺がやや内側に湾曲している。長さ30〜40cm、幅5〜12cm、厚さ4mm、外面は灰褐色〜赤褐色、内面は赤褐色で両端は荒く切られる。

ている。特異なおいがあり、味は甘く、やや辛い。調製中に削ったり、切断したりした残物を「桂心」「桂碎」と呼んでいる。

横切片を顕微鏡で観察すると(図2)、最外層はクチクラに被はれた上皮が所々に見られ、その内側に三〜六層のコルク層が配列し、長さ10×50μmの接線方向に伸びた薄膜のコルク細胞があり、その内側に一〜二層のコルク化石細胞、さらにその内側には外方の膜が著しく肥厚し、クチン化した細胞が一層形成している。皮部は比較的広く、第一次皮部、第二次皮部は石細胞環で区分される。環の各石細胞の膜はしばしばU字形に肥厚し、径30〜120μmとなる。

第一次皮部は薄膜またはやや厚膜化した柔細胞で構成され、この中に単独または五〜六個の群である石細胞が散在、また、油細胞、粘液細胞も見られる。中央部分には石細胞群が断続的に環状となって見られる。石細胞の外壁は比較的薄膜で、類円形、方形、多角形を呈し、径32〜88μmである。石細胞の外側には繊維束が伴っている。油細胞は類円形、長円形で径45〜100

μmで、黄褐色の物質を含んでいる。粘液細胞は径30〜120μmで粘液を含んでいる。

第二次皮部は薄膜の柔細胞からなる柔組織があり、所々に油細胞、粘液細胞および厚膜繊維が存在する。師部は不明瞭で、形成層も分かりにくい。放射組織は一〜二列ロート状である。師部には石細胞と粘液細胞が分布し、また、厚膜繊維が単独或いは二〜三個群となって存在する。

師部中の放射組織は一〜二層で、長さ4〜7μmの小さなシユウ酸カルシウムの針状結晶を含む。柔組織の細胞中には円球形、多面形で径10〜20μmのどんぶん粒を含んでいる。

種子繁殖及び挿し木などで育種、増殖が行われ、雲南省奥地での栽培経験では7〜8年から一〇年で生薬としての収穫が可能となり、出荷される。

『古方薬品考』に「肉桂即桂の幹皮気味辛甘大温故能温中州宣導諸薬之能功也」蜀椒閉口者有毒即チ、誤食之戟人咽喉気閉欲絶肉桂煎汁飲之——肉桂に舶来ノモノ數品アリ「東京(トキン)桂」ト稱ス其者厚一分許デ色ハ紫赤味辛甘者上品

ト為ス或是ヲ「字肉桂 トヨブ而シテ優劣ハ其裏面ガ黒色ヲ帯ビ辛味薄者ハ下品ナリ今ノ「廣南桂 ト稱ス皮薄ク辛味厚(カラ)クナイ又舊舶(コワタリ)ノ廣南ト稱ス者皮厚ク一、二重巻テ色紫黒味極辛ク甘ク「久呂皮肉桂」ト呼ブマタ「交趾桂」ト稱ス者東京桂ノ如クシテ深紫色味亦厚シ——方書中ニ出ル所ノ桂ノ之品目モ亦少カラズ仲景氏桂枝ト曰ヒ、孫思邈ハ桂心ト曰ヒ、空菜ニ至テハ肉桂ト曰ヒ、辣桂ト曰ヒ、官桂ト曰ヒ、薄桂ト曰ヒ、總テ是同物デアール」と解説がある。

芳香性健胃・驅風薬としての応用もあり収穫する際の木の年数に影響があるものと考えられ、収穫者の経験も大きい。

薬能として気の上衝の主治を目標として、比較的体力の低下した人で、下腹部から突き上げる症状、頭痛、のぼせ、発熱、悪風、自汗、身体疼痛、胃腸の機能を整えるなどに応用され、漢方薬の基本方剤である桂枝湯類に配剤される他、葛根湯、麻黄湯、小青龍湯、安中散、小建中湯、八味地黄丸など多くの方に配合される。

桂皮を噛むと舌を刺激する辛

辣味があり、且つ甘く、これを煎じるとさらに芳香を放つ。甘いと味がするため甘味の緩和作用によって辛辣味が減殺される。

桂皮の入った方剤を適応証で①気のめぐらせ（桂枝加桂湯、苓桂甘棗湯）、②表証（桂枝湯、五苓散、麻黄湯、葛根湯）、③裏となった気のめぐらせ（苓桂朮甘湯、八味丸）といわれる。

各々の効果を發揮させる要因は品質の選定、評価の見る目が肝心、外形での判断、皮の厚・薄だけでなく、種類の鑑別を念頭に置き、味が強く、甘味があり、渋みが少ないものを選ぶことに心掛けたい。



岡田 稔
(おかだ・みのる)



昭和三十五年、東京薬科大学卒業。同年、(株)津村順天堂（現・(株)ツムラに名称変更）に入社。入社当時から植物を基本とした生薬の形態学を専攻。傍ら薬用植物の栽培と品種改良、新品種の作出・育成等を行い、生薬全般の品質評価・判定を担当する。

わ かん やく しょ ほう
皇漢名医和漢薬処方

石原保秀編／難波恒雄解題／矢数道明序文
／A5判／350頁／6,000円(税別)

本書は昭和2年刊の原本の復刻に、その後、雑誌『漢方と漢薬』に掲載された続録を付した。内容は先哲名医の遺した処方を集めたものであるが、現代においても活用価値は大である。

きん き よう りやく けん きゅう
金匱要略の研究

大塚敬節著／山田光胤校訂／A5判
708頁／8,000円(税別)

本書は、難解の書と言われながらも、現代医学の実用書としての評価が高い『金匱要略』に新しい生命を与え、臨床家及び研究者の利便に供する書として、本著者が『傷寒論』と共に生涯をかけて取り組んだ『金匱要略』研究の貴重な遺稿である。

わ かん やく せん びん やっ こう
和漢薬の選品と薬効

木村雄四郎著／B5判／448頁／9,000円(税別)

昭和46年2月～昭和53年9月の『和漢薬』誌に90回にわたって掲載されたものをまとめたものである。その掲載品目は110点に及ぶ。240点余の写真の大半は著者自身の貴重な資料からである。今回の再録にあたっては構造式の全面書きかえとともに若干の加筆、修正、削除をし、読み易くした。

しょう かん ろん
傷寒論
べん みやく ほう へい みやく ほう こう ぎ
弁脈法平脈法講義

大塚敬節著／B6判／180頁3,500円(税別)

本書は、埋もれていた「傷寒論研究」の貴重な資料の新組復刻である。本著者の名著『傷寒論解説』の補遺ともいべき貴重なもので、併せて傷寒論の全文であり、また脈学研究的の資でもある。

申込み
問合せ ▶ **たにぐち書店** TEL.03-3980-5536 FAX.03-3590-3630

薬草百話④⑩

ケイ(桂)類 II

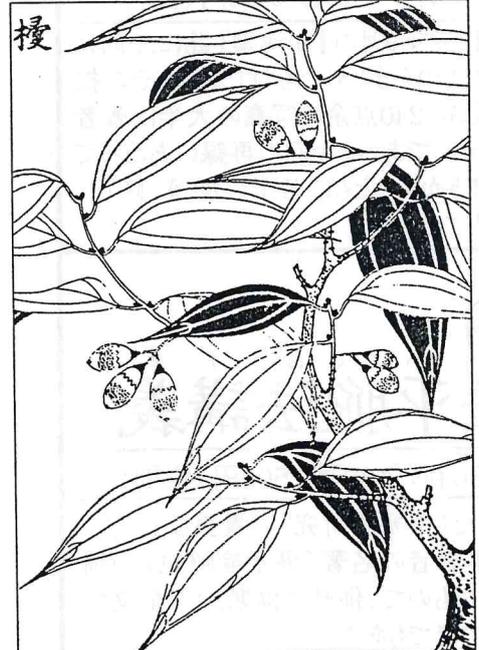
●中国名 肉桂类 (ròu guì lèi)
●学名 *Cinnamomum species*
●英名 cinnamon plants
日本大学名誉教授 滝戸 道夫

滝戸 道夫

桂類の薬能については『国譯本草綱目』によると、『神農本草經』では菌桂と牡桂が記載され、菌桂は「百病(諸々の病)を主る。精神を養い、顔色を和げ、諸薬の先聘通使(導いて働かせる)となる。久しく服すれば、身軽くし、老いず、面に光華を生じ、媚好(見め良い)にして常に童子の如し」と述べ、牡桂は「上氣咳逆(のぼせによつて起こる咳)、結氣(邪氣が結して集まること)、喉痺吐吸(喉の麻痺による呼吸困難)を主る。関節を利し、中を補し、氣を益す。久しく服すれば神(精神)に通じ、身を軽くし、老いず」と記しており、氣味は共に「味は辛、温で毒なし」と記述されている。

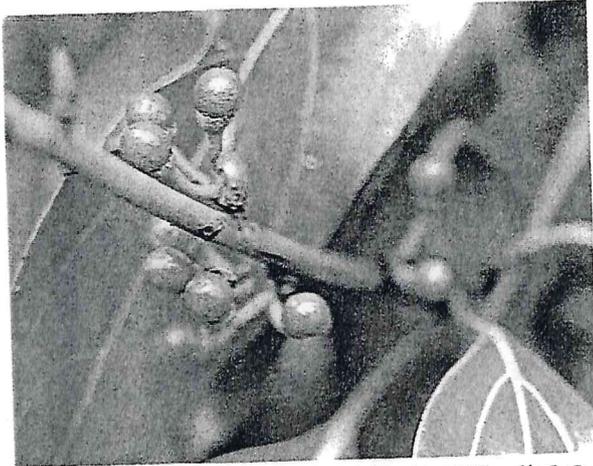
『名医別録』(約五〇〇)では牡桂と桂が記載されており、牡桂の主治として「心痛、脇痛、脇風。筋を温め、脈を通じ、煩を止め、汗を出す」とあり、桂については「肝、肺の氣を利す。心腹寒熱、冷痰、霍亂、轉筋(こむらがえり)、頭痛、腰痛。汗を出し、煩を止め、唾を止める。欬嗽、鼻鼈(鼻つまり)、胎を墮す。中を温め、筋骨を堅くし、血脈を通じ、不足を理疏(除く)し、百薬を宣導し、畏るところのものなし。久しく服すれば神仙(仙人)となり、老いず」と記述している。

また、『増訂本草備用』(二七二九)では肉桂、桂心および桂枝が記されており、肉桂は「大イニ燥シ、腎命ノ火ヲ補フ」とし、「氣味ハ辛甘大熱テ氣厚ク、純陽デアリ、肝腎ノ血分ニ入ル。肝ヲ平ケ腎ヲ補フ。命門相火ノ不足(生命の鍵となる両腎の機能の不足)ヲ補フ。陽ヲ益シ、陰ヲ銷(削)シ、沈寒鋼冷(寒氣が久しく臟腑に停滞する)ノ病ヲ治ス。能ク汗ヲ發シ、血脈ヲ疏通シ百薬ヲ宣導スル。營衛(脈中をめぐり全身を養う作用と脈外をめぐって身体を防衛する働き)ノ風寒(風と寒が結合した病邪)ヲ去ル。表虚自汗、腹中冷痛、欬逆結氣(咳で氣

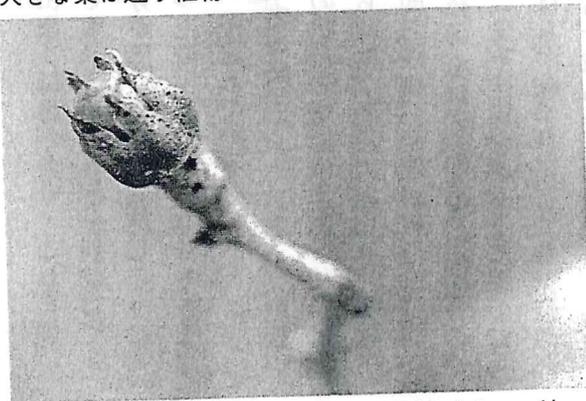


▲ニッケイ(『花彙』より)

が上に登り、邪氣が集まること)ヲ去ル。又能ク肝風ヲ抑テ而脾土(脾)ヲ扶ク。目赤腫痛及ビ脾虚悪食(悪阻)、湿盛泄瀉ヲ從治ス。経ヲ通ジ胎ヲ墮ス」と記している。桂心については「燥、陽ヲ補ヒ、血ヲ活ス」とし、「苦ハ心ニ入ル。辛ハ血ニ走ル。能ク血ヲ引キ汗ニ化シ膿ニ代シ、癰疽(大きな瘡瘍)痘瘡(天然痘)ヲ内托(治療)ス。癩ヲ消シ、肌ヲ生ズ。勞傷ヲ補ヒ、腰膝ヲ煖メ、筋骨ヲ續ク(つづかせる)。風痺癱瘓(腹内の塊)、噎膈(咽がふさがって、のみ下せない状態。食道癌)、腹痛、腹内冷痛、九種心痛ヲ治ス」と述べ、桂枝では、「輕、



▲ホンニッケイ(?)の果実 (果托がお椀型。後ろの大きな葉は違う植物の葉)



▲セイロンニッケイ(?)の果実 (果托がチューリップ型)

トモノ冷テ脉キレタルニ用テ速効アリ」と記し、また、「小兒ノ驚風(ひきつけ)及ビ泄瀉ニ五苓散ノ中ニ肉桂アリ。能ク肝風ヲ抑ヘテ脾土ヲ助クル所也」と云っている。「桂心」については「心痛ニ冷ヘテ腹痛ムニ。血ヲ破リ月経ヲ通ジ、胞衣(胎盤)後産)ヲ下シ腰膝ヲ煖メ風痺(中風で痺れる)骨節ノ攣ルニ用ユ。瘀血ヲ消シ、草木ノ毒

肌ヲ解シ、營衛ヲ調フ」とし、「辛甘ニシテ而シテ温、氣薄ク升浮ス。太陰肺、太陽膀胱經ニ入ル。経ヲ温メ脈ヲ通ジ、汗ヲ發シ肌(筋肉)ヲ解ス。傷風(感冒)頭痛、中風自汗ヲ治ス。營衛ヲ調和ス。邪ヲシテ汗ニ從ヒ出サシメテ而シテ汗自ラ止ム。亦タ手足ノ痛風脇風ヲ治ス」と記述している。

下す。桂は葱にまざると軟らかくなるので、葱の液で桂を煎ずると水になる」と記述している。日本の書籍では江戸時代初期の『靈宝薬性能毒備考大成』(二六八七)でも肉桂、桂心、桂枝を分けており、「肉桂ハ足ノ少陰、腎ノ太陰、脾ノ經ニ入り、桂心ハ手ノ少陰、心經ニ入り、桂枝ハ足ノ太陽、膀胱ノ經ニ入ル。共ニ血分ノ薬ナリ」とし、また、使用方法としては、「人参、甘草、麥門冬ニ與シテ中ヲ調ヘ氣ヲ益シ、柴胡、生地ニ與シメハ吐逆ヲ治ス。烏頭、

附子ヲ使トシ、大黃、黄芩ヲ使トス。皆其所ニ至リテ病ヲ治ス」と云っている。また、「肉桂ハ肝肺ノ氣ヲ利ス。是レ下行シテ腎ニ至ル故ニ氣モツレテ下ル。中ヲ温メ筋骨ヲ堅クシ血脈ヲ通ジ下焦(下腹腔)ノ不足ヲ補ヒ、秋冬下部ノ腹痛及ビ瀉痢ニ。命門ノ火ヲ益ス」と。また「肉桂ハ下行シテ命門(両腎)ノ火源ヲ補フ。腎ハ躁ヲ苦シム。味ヒ辛キハ潤シ腠理(皮膚のすき間)ヲ開キ津液ヲ生ジクバリテ其ノ氣ヲ通ズ。胸腹冷ヲ痛ムニ脉遲ニシテ血衰ヘ手足冷ヘテ表虚自汗ニ脾胃ヲ温メ血ヲ破リ経脈ノ中風ニ大ニ血ヲ温メ十二經ヲ通ズ。疱瘡ノ冷テ出ガタキニ氣血トモノ冷テ脉キレタルニ用テ速効アリ」と記し、また、「小兒ノ驚風(ひきつけ)及ビ泄瀉ニ五苓散ノ中ニ肉桂アリ。能ク肝風ヲ抑ヘテ脾土ヲ助クル所也」と云っている。「桂心」については「心痛ニ冷ヘテ腹痛ムニ。血ヲ破リ月経ヲ通ジ、胞衣(胎盤)後産)ヲ下シ腰膝ヲ煖メ風痺(中風で痺れる)骨節ノ攣ルニ用ユ。瘀血ヲ消シ、草木ノ毒

ヲ殺ス。音ヲ失ヒタルニ。陽虚ニ。失血。腫物ノ内托ニ能ク血ヲ引キ行ラシ濃ヲ化ス」と記し、また、「桂心ハ心ニ入テ血ヲ引キ汗ニ化シ膿ニ化ス」と云っている。桂枝については「味ヒ辛、甘、氣微熱ナリ。體輕ク上行シ浮テ升ル。上氣ノ咳逆ニ中ヲ補ヒ、氣ヲ益シ筋ヲ温メ脈ヲ通ジ傷風ノ頭痛ヲ治シ腠理ヲ開キ表ヲ解シ皮膚ノ風温ヲ去リ肺氣ヲ利シ、手臂ニ行リテ痛風ヲ治シ、能ク汗ヲ發ス」と記されている。以上のようにこの書物では肉桂、桂心および桂枝を別の薬として、それぞれ薬能を異にするように記し、特に肉桂は下行して腎を補い、桂枝は上向して表に働く如く述べられているが、これは中国の金元以後、李杲の著書『脾胃論』などから得られた知識であると推察される。しかし、これに対して『薬徴』では、この説は臆測であり、肉桂、桂心、桂枝は一物であるとし、その名を桂枝のみとし、薬能としては「衝逆(氣が下腹部よりつきあがること)を主治するなり。傍ら奔豚(病名。少腹脹満

し、気が上衝し、豚が疾走する
ような症状)、頭痛、発熱、悪
風、(悪寒の軽症)、汗出でて身
痛するを知らず」と記している。

しかし、江戸後期の『古方薬

品考』では「桂枝」ハ前鋒、

発表ノ宰宗。「肉桂」ハ中ヲ温

メ、百功ヲ宣導ス」と云つてお

り、『名医別録』の薬能を挙げ、

その後に「愚案」として「桂ノ

物タル純陽発散。其ノ枝ノ性ハ

自ラ表面に達シ、皮ノ性ハ自ラ

肌膚ニ走ル。味辛熱甘和シテ芳

発ノ氣アリ。善ク發表ノ前鋒ヲ

致スナリ。故ニ仲景氏(張仲景、

『傷寒雜病論』の著者)肉桂ヲ

用イズシテ、専ラ桂枝ヲ用イル

ノハ其枝皮以テ發表ニ利シキノ

義ニ取レリ。其レ麻黄湯、大、

小青龍湯發表ノ功アル者ハ皆桂

枝ノ功ニヨツテ致ストコロナ

リ。故ニコレヲモツテ發表ノ宰

宗トナスナリ」と云っている。

肉桂の「案」には「肉桂ハ即チ

桂ノ幹皮ナリ。氣味辛ク甘ク大

温。故ニ能ク中州ヲ温メ、諸薬

ノ能功ヲ宣導スルナリ」として

いる。加えて民間の利用として、

「口を開けていない蜀椒(中国

の山椒)は毒があり、これを誤
つて食べると、のどを刺戟して
気分が悪くなり、氣絶しそうに
なった時、肉桂の煎じ汁を飲ま
す」と記している。

『古方薬議』(一八六三)の桂

枝の積品の項には「蓋し牡桂は

即ち幹皮、所謂肉桂なり。菌桂

は即ち枝皮、所謂桂枝なり。但

だ枝幹を以て名を異にするの

み。凡そ桂枝を用ふるに大小に

拘はらず味辛甘にして香氣烈し

き者を取るを佳と為す……略」

と述べ、釋性(薬能)は「味辛

温、関節を利し、筋脈を温め、

煩を止め、汗を出し、月閉を通

じ、奔豚を泄し、諸薬の先聘通

使と為る」と記述している。

また、『増訂和漢薬考』(一九

二五)には「桂枝」として「漢

医衛逆ヲ治スルノ要薬トス」と

ある。従つて日本では江戸後期

には桂枝と肉桂とを分けて使用

したが、末期以後は桂枝の名で

肉桂、桂心、桂枝を区別しない

で利用し、現在は日本薬局方に

「ケイヒ(桂皮)」の名で区別さ

れずに規定されている。

然しながら現行の『中華人民

共和国药典』では前述の如く
「肉桂」と「桂枝」が規定され
ており、肉桂は「辛、甘、大熱
で「帰経」は腎、脾、心および
肝で、「功能主治」は「補火助

陽、引火帰源、散寒止痛、活血

通経の機能があつて、陽痿(陽

病で手足無力)、宮冷(子宮の

冷え)、腰膝冷痛、腎虚作喘、

陽虚眩暈、目赤咽痛、心腹冷痛、

虚寒吐瀉、寒疝、奔豚、経閉や

通経に用いるとして記している。加え

て出血傾向のある者および妊婦

には慎重に使い、赤石脂(雲母

源の粘土で主にカオリナイトと

酸化第二鉄を含む)と一緒に使

つてはいけなさと注意してい

る。また、桂枝については「性

味」は辛、甘、温で「帰経」は

心、肺、膀胱であるとし、「功

能与主治」としては「發汗解肌、

温通経脉、助陽化氣(補陽して

氣滯をめぐらす)、平冲降氣

(平らかに、和やかにして氣の

上逆を下す)の機能があつて、

風寒感冒、腕腹冷痛、血寒経閉、

関節痺痛、水腫、心悸、奔豚に

用う」と記されている。

また、中国では『中薬現代研

究与臨床応用』(一九九三)九
七)によると「桂枝」は他の生
薬とともに小児の股の着け根の
ヘルニアや流行性感冒予防や低
血圧症の治療に、「肉桂」は狭

心症に末を川芎末とともに舌下

粘膜外に噴射し、低血圧症に桂

枝、甘草とともに茶剤で、気管

支炎に防風、黄耆とともに微末

を吸入あるいは貼布して、痛経

に丁香、延胡索、木香とともに

煎剤として、その他不眠症、関

節炎、遺尿、インポテンツ、腰

痛、急性細菌性下痢などの治療

に用いているようである。

日本では桂皮を芳香性健胃

薬、驅風薬の主薬とし、その他

瀉下薬、かぜ薬、解熱鎮痛薬や

鎮咳去痰薬に他の生薬や化学薬

品との合剤として用いられてい

るが、漢方療法としても多量に

使用し、『傷寒論』、『金匱要略』

以来の伝統ある有名な処方多数

多くあり、厚生省選定の一八九

方剤中に六三処方(約三二%)

も入っている。主なものを挙げ

ると桂枝湯とその加減方剤、桂

枝加桂湯、桂枝去芍薬湯、桂枝

甘草湯、桂枝加枳実生姜湯、桂

枝加葛根湯、桂枝加芍藥大黃湯、桂枝各半湯、桂枝茯苓丸などの外、柴胡桂枝湯、柴胡桂枝乾姜湯、柴胡加竜骨牡蛎湯、柴苓湯、五苓散、八味地黄丸、葛根湯、麻黄湯、当帰四逆湯、小青竜湯、茵陳五苓散、牛車腎気丸、温経湯、苓桂朮甘湯、苓桂甘藶湯、安中散、甲字湯などがある。なお『中華人民共和国薬典』記載の方剤三九八処方中桂枝の入ったものが六、肉桂を含んだものが十八、桂皮が配剤されたものが一処方ある。

このように、日本では「ホンニツケイ」を基源とする生薬は桂皮一種として薬用になっているが、中国では肉桂と桂枝に分け、薬能も異なる生薬として使用されているので、検討する必要があるように思われる。

近年の桂皮の化学および薬理研究では生薬中に一〜三・五%含まれる精油中の主成分のチンナヌルデヒドには解熱、皮膚血管拡張、抗カビ、抗菌作用、中枢抑制、血圧降下、末梢血管拡張および胆汁酸分泌促進作用などが明らかにされており、また、

ノルセスキテルペノイド化合物のチンナモサイドやタンニン成分であるシンナムタンニンB₁およびD₁に強い抗潰瘍作用があることが判明している。これらのことは桂枝の入った漢方方剤が発熱、頭痛、発汗、のぼせや四肢痛の治療に用いられることの一部を証明するものであるであろう。その他、アルコールエキスに抗血栓、血小板凝集抑制や酸化作用のあることが判明しているし、また、含有多糖類のシンナマンA₁に網内系賦活作用のあることも証明されている。

なお、日本薬局方には「ケイヒ末」および「ケイヒ油」が規定されており、前者は「ケイヒ」を粉末としたもので、後者はホンニツケイの葉と小枝もしくは樹皮またはセイロンニツケイの樹皮を水蒸気蒸留して得た精油である。また『中華人民共和国薬典』でも「肉桂油」を規定しており、こちらはホンニツケイ（肉桂）の乾燥した枝、葉を水蒸気蒸留して得た揮発油である。「ケイヒ末」は胃弱、食欲不振、胃部・腹部膨満感、消化

不良、胃のむかつき等の治療に服用し、「ケイヒ油」や「肉桂油」は製剤用の賦香料にする外、健胃薬、駆風薬とする。

その外、『国譯本草綱目』の牡桂の項には「葉」についての「主治」が記述されており、李時珍は「搗き碎いて水に浸し、髪を洗えば垢を去り、風を除く」と記されている。また同書には、『本草綱目拾遺』（一七六五）に記載されている「桂子」の項があり、別名を桂丁というが、これは現在「肉桂子」という生薬で「ホンニツケイ」の萼が付い

た未熟の果実で『中葯志』（一九八四）によると中国の広西省で生産され、十〜十一月に摘花した未熟の果実を晒して乾燥した後、不純物を取り去ったものであり、成分として精油を約三%含み、その主なものはチンナムアルデヒド（四・三%）で、その外桂皮酸、クマリン、シトステロールなどが検出されている。胃寒疼痛、嘔吐などの治療に利用すると述べられているが日本市場には桂の葉、桂子ともに無いようである。



滝戸 道夫
(たきど・みちお)

大正十四年

昭和二十二年

昭和二十四年
昭和四十二年

現在

静岡県生まれ
星薬学専門学校（現・星薬科大学）卒業

東京大学医学部薬学科選科修了
日本大学理工学部薬学科（現・薬学部）教授

日本大学名誉教授 薬学博士
東京大学総合研究博物館協力研究員